
へっぽこポケモン探検記 番外編～憩いの部屋

ものかき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

へっぽこポケモン探検記 番外編〱憩いの部屋

【Nコード】

N4641U

【作者名】

ものかき

【あらすじ】

へっぽこポケモン探検記シリーズの裏話や秘話を込めた番外編です。ここでは何でもあります。いろいろな企画をやっていると思います。

「あいさつ（前書き）」

へっぽこポケモン探検記に番外編を設置しました〜！！

カイ

「まだ初めて一ヶ月なのに、こんなことしていいわけ？」

ここは小説として扱ってないんで

カイ

「……」

「あいさつ」

どうも〜！ものかきです！

へっぽこポケモン探検記の力オスな番外編〜憩いの部屋へようこそ！

全員

『パチパチパチ〜』

本編の方ではギャグ要素が少ないと感じていたものかき。なら番外編でぶっちゃけたりはっちゃけたりしちゃう！という趣旨でお送りします！

全員

『パチパチパチ〜』

思えば、ビクビクしながらへっぽこを投稿してうん日、ものかきがかこまでこれたのは読者の皆さんのおかげです！！この場を借りて、読者みな様に感謝の挨拶を申し上げます！！

全員・ものかき

『ありがとうございます！！』

さて、では番外編、本格始動でございます！！

全員

『わーーーー！！（ばふばふ！ドンドンドンド！）』

えー、では……。

ドンドコドンドコ、ドンドコドンドコ……

「くるああッ！！」

誰じゃあ！！まだ太鼓をならしとる奴はあッ！！

ローゼ

「あ、バレました？」

キサマかああああッ！！流浪めええええ！！

ローゼ

「ほほう、逃げたほうがよろしいですね（ダッシュ）」

待てやああああ！！（ローゼ追いかけ）

カイ

「…………えー…………ものかきが暴走したので、今回はこの辺で、さようなら」

しあわせつ（後書き）

番外編もよろしく願います！

お知らせ

どうもー！ものかきです！

カイ

「カイです……って、今日は僕一人なんだね」

そうですね。

カイ「どうして？」

今回はお知らせだけなんでね。全員連れてくる必要はありませんよ。
ドンチャン騒ぎになりかねないから。

とくにあんのド方向音痴めが調子に乗りかねない……！！（殺気

カイ

「（まだ前回のこと根に持ってるんだ……！！）」（ガクブル

んま、それは置いておいて、今回はお知らせがあります。

カイ

「そうそう、さっきからずっと言ってるけど、そのお知らせって何？」

よくぞ聞いてくれました！！さすが主人公！

カイ

「いや……（この進行表という名のカンペにそう指示が書かれてるだけなんだけど……）」

ん？なんか言った？

カイ

「イエ、ナニモ？」

さて、お知らせというのは他でもない！！わざわざ番外編を作ったからには、それなりに何か企画をやらねばこの場の意味がないというもの！！ですから、今回は企画案内をしたいと思います。

カイ

「（進行表を盗み見……）して、そのタイトルは？」

刮目せよ！題して……！？

L e t ' s 対談withフレンズ！！

カイ

「……はい？」

おい、そこ拍手だろい？（小声

カイ

「……わー。パチパチ」

よろしい。では説明しましょう！

L e t ' s 対談withフレンズは、この番外編を利用して全国津々浦々のキャラたちと対談をしよう、という企画です！

カイ

「つまり……募集ってこと？」

早い話がその通り。しかし、まだ趣旨を説明していなかったね。

違う小説のキャラさんをこの場にお呼びして、へっぽこ出演キャラと対談を行います。対談ごとにテーマは変わります。普段は交わることのないキャラ同士で交流を深めよう！！という趣旨でございます。

カイ

「ちなみに、対談には質問コーナーとお悩み相談も兼ねてるらしいよ？」

その通り。テーマは自由ですから、何でもよろしいわけです。一緒に何かで遊びたい、でも、恋の相談でも良いわけです。

カイ

「大丈夫……？ちゃんとできるかな……？」

主人公が弱気発言してどうする（汗）

では、詳しい募集方法です。

対談に出演したい作者様は、メッセージにてその旨をお伝えください。

メッセージを書くに当たって……。

- 一、出させたい自身小説キャラの名前一〜三匹（人）
- 二、対談テーマ

三、対談したいへっぽこキャラー(三匹(人))

四、ものかきの合いの手の有無

五、そのた質問や備考

をご記入願います!!

いままでこの小説全然興味なかったのにキャラは出してみたいな
ゝ、みたいな一見さんでも大歓迎!

もちろん、人間の参加も可! 対談相手のへっぽこキャラも誰でもオ
ッケーです。

ものかきの合いの手の有無というのは、やはりキャラ同士だけで話
したいっ!! という人におすすめです。

……ふう、これぐらいかな?

カイ

「ねえ、誰か来るの? 一匹も来ないで寂しい感じになりそう……」

そんなのは神のみぞ知ることですよ。こなかったらへっぽこキャラ
ラ同士で対談しよ

カイ

「寂しいね、それ」

では、ただいまより募集を開始しまーす!!

カイ

「よろしく願います!!」

では、今回はここで失礼します。さようなら！

お知らせ（後書き）

いきなりの企画ですが、興味のある方はどしどしメッセージをどうぞ。

よろしくお願いします。

へっぽこ誕生秘話

どうも。ものかきです。

カイ

「へっぽこのへっぽこ主人公カイです」

スバル

「へっぽこのパートナーのスバルです」

いやー、知らない間に七月ですねえお二人さん。

スバ・カイ

「「そーですね」」

七月八月はそれなりに好きな月ですよー？この二つの月でますます更新に力が入ればいいですねえ。

スバ・カイ

「「そーですね」」

あんまり興味なさそうだね……（涙）

カイ

「あーあ、いじけちゃったよ、ものかき」

スバル

「何でもいいから早く今日することを教えて（10万ボルト準備）」

……さて、今回はタイトルにもあるようにへっぽこの誕生秘話について一人と二匹でカミングアウトしましょう！！

スバル

「私ってやつぱり“一匹”扱いなんだね……」

じゃあ、最初のカミングアウトだよ？（スルー

1、へっぽこポケモン探検記はどこから湧いて出た？

はー、これ正直に言っちゃっていいんですかね？

カイ

「カミングアウトしようって言ったのはものかきでしょ？」

は、はい、そうです（汗）

へっぽこポケモン探検記（以下へっぽこ）はいわゆる二次創作ですね。ものかきはこれを書く前はバリバリ一次創作をしていました。

スバル

「今じゃその一次創作たちは大変ご無沙汰してるよね」

一次創作キャラたち

『早く更新しやがれー！ー！ー！』

君たちレッドカード！！退場ッ！！

カイ

「それで、一次創作作者のものかきがどうしてこんなことに？」

そうですね、あるとき一次創作がまったく進まないといったスランプに陥ったときにはほんの気晴らしのつもりでにじファンをのぞいてものかきが好きなアニメのポケモンを検索したら……彼らに出会ってしまったわけですよ。

スバ・カイ

「「彼ら？」」

ポケモン小説を執筆なさっている大先生方ですよ！！一回画面をクリックしたら『次のページ』をクリックする手が止まらんです！！

スバル

「ちなみに、最初に読んだ先生の小説は？」

ものかきが最初にお気に入り登録をした作者様の小説です。某高所恐怖症が出てきます。

（うわ、カミングアウトしちゃった！！これ放送コードぎりぎりセーフ！？）

カイ

「まさかとは思うけど……その人たちの小説を読んで自分も書きたくなっ、ちゃっ、た、と、か？」

……カミングアウトおおおお！！（10万ボルト&ハリセン）

スバル

「わ、私たちってそんな軽いノリで作られたの!？」

こら、そんなこといわない!

と、まあ自分も書けるんじゃないの? 見たいなアホなノリでルーズリーフの前に正座したものかき。

カイ

「(ぜつつつしたい正座なんかしてない)」

「ん、と……やっぱりものかきはゲームをそのまま小説にするのは目がしょぼしょぼするからむりなんだよねえ……じゃあオリジナル? えー? でも名前考えるの面倒くさっ。んじゃ、登場人物はゲームから借りるとして……。じゃ、主人公はリオルのカイってことで……でもなあ、最初から強かったら内容が後でグダグダになりそうだなあ……じゃ、まさかの貧弱設定でw

ヒロイン? ピカチュウにしようか。名前? そこら辺の借りよっ(蹴)じゃ、スバルで(即決)。……ん? でもなんかただのヒロインじゃベタすぎだよねえ。なんか特殊能力的なの入れる? 時空の叫び的な……ああ、能力考えるのめんどくせ。……そういえば、ゲームどちらも元人間で内容が始まるよね? じゃ、まさかの元人間にする? ……」

(さらさらさー、と書き進めるものかき)

スバ・カイ

「……(こいつアホだ……)」

と、まあそんなこんなでへっばこの骨格が完成しました!。それを

パソに書き写し、さあ投稿！ドキドキ……。見たいな感じになった
わけです。

2、このネーミングセンス最悪なタイトルはどうやって決めた？

……さらにカミングアウトしたくない内容……。

カイ

「たしかにね。ものかきは身内からお墨付きをもらっちゃうネー
ミングセンスしてるからね。もちろん悪い意味で」

くっ……。！急所に当たった！

スバル

「で？どうやって決めたわけ？」

……いざ投稿するときになってタイトルどうしよう！？って冷や汗
をかいたものかきは、小一時間ほど画面の前で格闘します。

『タイトルどうしよう、どうしよう、どうしよううううう！！』

くっそおう！タイトルのネーミングすらも出来ないへっぽこめええ
え！

……へっぽこ？いいね、それいい。主人公貧弱設定だし。んじゃ、
へっぽこ……。その後が続かないなあ。じゃあここは王道の「ポケモ
ンなんとか」みたいなノリでへっぽこポケモン……。探検記？うー
ん、リズムはいいけど……。

これ以上考えても出てこないし……。これでいいか』

（タイトルく早く投稿したい）

カイ

「……………（こいつだめだ……………！）」

スバル

「ちなみに、このタイトルはやはり身内に「相変わらずネーミングセンス悪いね」といわれたらしいよ」

……………ぐすつ。

と、まあこれがへっぽこを投稿する前のお話ですね。

カイ

「相当カミングアウトしたよね。こっちがものかきをシバきたくなるぐらい」

うお！怖ええよ、貧弱！

スバル

「私もシバきたくなってきた（ビリッ）」

ひいひい！ごかんべんをおおー！

と、まあ今回のカミングアウトは読者様に大波乱を呼びそうです！

（爆）

カイ

「今日のところはこれでカミングアウト終了?」

はい。

スバル

「またカミングアウト……するよね?」(プレッシャー)」

わ、わからん。

では、この辺で。さようなら。

キャラ紹介1（前書き）

第三章終了記念にキャラ紹介を載せました。今回は二章までの中心キャラを紹介します。

キャラ紹介1

名前（種族名）：性別／一人称

カイ（リオル）： / 僕

本作で主人公的ポストに位置するキャラ。破壊的に体力がなく、へっぽこの代名詞。自分よりも他人のことを第一に考える性格で、そのためにはかなり無茶をする方。里にいた頃は基本一人で行動していて、団体行動についていく体力がない。ちなみにリオルなのに“波導”は読めない。“もうひとりのカイ”の魂をその体に宿している。覚醒している時は記憶がまったくないというある意味都合がよい仕様となっている。

スバル（ピカチュウ）： / 私

怪我をしたカイを助けたのをきっかけに一緒に行動するようになったカイのパートナー的存在。元人間。記憶喪失で、人間だった頃の記憶がない。コントロール不能ながら電撃の軌道をそらすことができる上、バトルでは力の差を頭の回転の早さでカバーできる力量の持ち主。腹黒説浮上中。

シャナ（バシャーモ）： / 俺

元マスターランクの探検家にしてスバルの師匠。つい最近までNDに陥っていたが、スバルの協力もあって自力で回復。かなり悲観的^{ネガデ}

思考で、バトルは強いのに日常ではまず強いと思われたことがない。戦法は“隙あらば大技”。最近は弟子の扱いと親友のイジメに頭を抱えている。

ルテア（レントラー）： / 俺

現役救助隊でシャナとは幼い頃からの親友。大胆、豪気な性格で少し気が荒い。一度キレたら暴言のオンパレードで暴走する。しかしバトルや任務ではその性格とは違い、緻密な戦略を立て絶対に無謀なことをしないのを信条としてしる。スバルに10万ボルトを教えた張本人。趣味はシャナイじり。

リン（ハクリュー）： / 私

カイの育ての親。“イーブル”の部下に攻撃を受けた後の安否と消息は不明。カイのことを実の子のように大切に育てているものの、怒った時には容赦なく雷を落とす。

ヤド仙人（ヤドキング）： / わし

本名不詳。ヤド仙人というあだ名はカイが命名した。気難しいがさみしがり屋な性格で、自分の住みかに来た客にたいして延々と“ご教授”をするのが趣味。友達が少ない。昔は師匠と山ごもりをして修行をしたらしく、本来なら覚えられない“テレポート”や、特殊な薬の調合などの離れ業を多数所持。“イーブル”に襲撃を受けた後の消息、安否は不明。

プワプワ（フワライド）：

“イーブル”の小隊長的存在。語尾に『プワ』をつけるが、わざとやっているのではないかという噂が“イーブル”の間で絶えない。サディスティックな性格だが、結局シヤナにボコられる始末のかわいそうなポケモン。

キャラ紹介2（前書き）

今回は第三章のへっぽこキャラを紹介です！

キャラ紹介2

名前（種族名）：性別／一人称

ローゼ（フローゼル）：／わたくし

丁寧な口調の裏にどこか胡散臭さを隠せない謎の流浪ポケモン。主人公たちとは川で行き倒れになっているところを発見された。スバルの“10万ボルト”をもろともせず、常に敬語で間延びした語尾が癖。流浪ポケモンのくせに超がつく方向音痴で、整備されている道を歩いても迷うという重症っぷり。（但し一度通った道は戻る。）鈍感なときと敏感なときの差が激しい。

ミーナ（シェイミ）：－／私（ボク）

隠れ里の自称案内役。^{ガイド}自分の住む里を観光地にするのが夢。長老の反対で半ばあきらめかけていたが、近々実現予定。さばさばした性格で、空の頂に関する知識と土地勘にかけては右に出るものはいない。グラシデアの花の花粉でランドフォルムからスカイフォルムに変化する。そうなった場合姿だけではなく口調や一人称・性格も若干変化する。無性である自分に対して“お嬢さん”と呼ばれるのはあまり好きではない。（クーガンの場合キレる。）

長老（シェイミ）：－／わし

隠れ里のシェイミたちの長老。結構頑固な性格。また世間に疎い。

作者のせいであまりいいところが見られなかったが、最後にはミーナの夢を応援する形になる。

アリシア（クレセリア）： / 私

ダークライのNDを阻止しようと各地に散らばった“三日月の羽根”を集めていたところ、襲撃に遭いカイたちと出会う。ほかのポケモンとのコミュニケーションが苦手という裏設定が存在する。人前に現れないというクレセリアの種族柄、ポケモンとほとんど話さないからそれは普通といえる。自分の使命に忠実な性格で、いつでも丁寧な口調を心がけている。

クーガン（スカタンク）： / 俺（俺様）

いつも誰かに前口上を邪魔をされてしまう、チョコっと気の毒なポケモン。“イーブル”の幹部だが大口を叩くわりに実力はあまりない、なぜ幹部なのか謎なポケモンである。ミーナにぼこられる。

バソン（バクオング）： / おら

普段の喋り方から大声過ぎて耳に障るポケモン。“イーブル”の幹部。彼のハイパーボイスは下手をすれば鼓膜を破るほどなので、受けるときは脳へのダメージの注意が必要。しかし、頭が小さいせいか技以上の実力が出せなくて、あえなくスバルにKOを食らうことになる。

ダークライ（ダークライ）： - / 私

個人名不詳。“イーブル”のメンバーという名目だが、実際の地位や立ち位置は不明。シャナを軽く下すほどの強さを誇り、NDを起こした張本人でもある。奇麗事を嫌い、相手が苦しむ姿を見て快感を得るいわばサディスト（？）な性格。意外に強い相手との戦いを好んでいる。

もう一人の僕（ ）： - / 私

カイの覚醒で唐突に現れた意識体（？）。カイの味方ということ以外全てが謎に包まれている。カイの体を借りて表に現れる。落ち着いて冷静な物腰で、アリシアの蘇生処置も行えるほど波導の扱いに長けている。時々カイの夢に現れてカイの安眠の邪魔をしたりする。

第一回 LET・S対談withフレンズ（前書き）

記念すべき第一回目の対談でございます！

正直出来のほうは不安ですが、楽しんでいただけたらと思います！

一応これはへっぽこ本編の親方様搜索編が終わったときに書いたものです。ネタバレはないと思いますが、心配な方はそこまで読んでもいいかと思えます。

では、どうぞ。

第一回 LET・S対談withフレンズ

どうも、ものかきです。

カイ

「カイです」

スバル

「スバルです」

さて、現在我ら一人と二匹は、ものかきの家にてこたつの無いこたつテーブル囲んでの会話をしております。

カイ

「それはいいんだけどさ、ものかき。何で僕たちが作者の家にいるのか説明してよ」

ふふ、その質問を待っていた！さすがはへっぽこ主人公！！

カイ・スバ

「……」

君たちを呼んだ理由は他でもない！ズバリ！！

第一回、LET・S・対談withフレンズを行うからだ！！

パチパチパチパチ！

（手が千切れんばかりの拍手をするものかき）

カイ・スバ

「……パチパチ（まばらな拍手）」

ん？どうしたんだい君たち、テンションがローではないのかね？もつとアゲアゲで行こうよ！！

カイ

「いや、そんなことを言われてもね。実感がわかないと言っか……」

スバル

「対談するならなんでものかきの家なの？どんだけ経済状況厳しいからって、作者の家のはげた畳の上でやるわけ？」

……うるさい！！んじゃ、どこでやれって言っんだいつ！？

スバル

「どこだっていいよ。ギルドのただっ広い会議室とか」

カイ

「赤坂サカスの高級レストランとか」

……。

（ものかきは君たちをそんな風に育てた記憶は……！！っていうか、赤坂サカスってチョイスはどうよ？ものかきですら行ったこと無いのに）

ま、いいでしょう。そろそろ待ちに待った対談相手と呼ぶことにし

ましょう！

スバル

「何が『ま、いいでしょう』『なの？』」

カイ

「席が二つ用意されてるってことは……ゲストは二匹？」

さあ？

ではでは……。

ぴかっとひらめき、さらっとかいけつ、時空ホールうつつ……開
け、ゴマっ！

カイ・スバ

「……」

（部屋のふすまの部分に時空ホールがぽっかりと開く。）

????

「やつほー、きたわよ」

????

「ほえー、ここがものかきさんのお宅ですか……」

（時空ホールからイーブイと女の子が入ってくる）

ようこそ、ものかきの家へ！さあ、どつぞどつぞ。

紹介しましょう、こちらのイーブイはルナさん。そしてその横はシーナさんです！リアさんのご紹介でへっぽこキャラと対談することになりました！因みにへっぽこキャラとは初対面ですね。

シーナ

「シーナです。はじめまして、よろしくおねがいします」

ルナ

「それはいいんだけどさ、なんでこんなに剥げた畳の部屋で対談しなきゃいけないの？」

……。

シーナ

「る、ルナ！それは……！」

カイ

「（……いきなりグサツと来たね……）」

スバル

「（……ま、普通そう感じるよね）」

シーナ

「も、ものかきさん！大丈夫ですからね！私たちは別に、畳が剥げていてふすまが黄ばんでる古くさそうな和室でも、全然構いませんから！」

……！（ガクッ）

スバル

「ものかきは倒れた！パスワードで友達に救助を依頼しますか？」

カイ

「スバル……ここはダンジョンじゃないからね。とにかく、よろしくおねがいします！」

スバル

「よろしくね」

さて、今回の対談内容を発表しましょう！

カイ

「復活はやっ」

ズバリ……？

カイとスバルの個人情報だーいこーうかーい！！
パーソナルデータ

カイ・スバ

「……はい？」

ゲストであるルナさん、シーナさんのご要望により、本人たちに直接個人情報を聞き出そう、というわけです！

ルナ

「色々質問を考えてきたわよ。正直に答えちゃってね」

シーナ

「ふふ、楽しみね」

カイ

「えー！？き、聞いてないよものかきい！」

フツ、どんな質問にも赤裸々に語りたまへ。

スバル

「（ものかきに10万ボルト放とうかな……？）」

じゃあ、最初の質問からレッツゴー！

ルナ

「まずはやっぱり二人の歳よね。本編を読んでも全然でないからさ」

シーナ

「出来れば、人間に換算したら幾つになるか知りたいですね」

ほう。

スバル

「えっ……。私、記憶喪失だからいくつかわからないんだけど……」

シーナ

「あ、確かにそうよね」

ああー……。君ねえ……。ここはあえて、何歳に見えます？ルナさん。

ルナ

「ええ！？どうして私に振るの！？……そうね、スバルはなかなか計算高そうな性格をしているから、意外に大人かもね十代の後半とか」

スバル

「え……？私って計算高い？自覚なかった」

カイ

「（え、ウソ！自覚なかったの！？）」

シーナ

「え？でも可愛いところもあるじゃない！えーっと、えーっとお…

…」

べ、別に無理に探さなくていいんですよ？所詮彼女は腹黒ですから。

スバル

「10万ボルト」

ぎいやああああ！

スバル

「あ、ついやつちゃった」

シーナ

「そう、今みたいなのがかわいい！！」

カイ・ルナ

「……」

スバル

「そう言えば、カイは人間に換算するといくつぐらい？」

カイ

「僕は、そうだなあ……。12〜14才の間ぐらいだよ」

シーナ

「なるほどー」

ルナ

「ま、そんな感じはしてたけどね」

シーナ

「どんな感じ！？」

では、次の質問行きましょう！！

カイ

「ものかき復活はやつ」

シーナ

「二人の好きな食べ物は何？」

ルナ

「シーナ、それ聞いてどうするの？」

シーナ

「今度作ってあげようと思って」

なるほど、優しいですね。

カイ

「うーん、僕は基本的に好き嫌いもないし、特別にこれだ！っていう好物はないなあ」

ルナ

「面白くないわね」

カイ

「グサツ！」

カイ、一発KO！！ダウンです！！

シーナ

「ああ！カイ君、大丈夫！？」

スバル

「私は木の実類が全体的に好きだけど……だけど、好きなのは断然あれね」

あれ、というのは？

スバル

「わたあめ」

全員

『えッ！？』

まじっすかー！！

ルナ

「意外！」

シーナ

「私じゃ作れそうになさそうね、残念」

カイ

「わたあめ……って、祭りのあれ？」

スバル

「うん。一度だけ師匠が昔街の祭りの屋台で買ってくれたの」

「シャナ、いつの間にそんなことを。ものかきが知らないところで……」

カイ

「屋台といったら、エルフーンのわたあめは定番だもんね」

ルナ

「へえ、そうなんだ。私も一度ポケモン世界の祭りを見たいな」

（そうか、彼女は元人間だから、ポケモン世界の屋台はまだ見たこと無いのか）

シーナ

「私、頑張って作ってみるわ」

全員

『え』

シーナ

「ものかきさん、ここにわたあめ製造機はないかしら？」

ありませんよ、そんなマニアックな……。

ルナ

「作者を困らせないでよ」

さて、ここからが本番！赤裸々タイムはもうすぐそこです！

ルナ

「気持ち悪いよ」

グサリ！！ひ、ひどい……。

スバル

「ものかき一発KO、ダウンです！！」

シーナ

「まあいいや、次の質問」

カイ

「いいの！？ものかきほつとくの！？」

ルナ

「ズバリ、二人の趣味よ！！」

シーナ

「気になるわよねえ」

カイ

「趣味かー。スバルは何が趣味？」

スバル

「そおだねえ、体を動かすことかなあ。カイと会う前はよくルテアに技を教えてもらってた」

そう言えば、君の10万ボルトはルテア直伝だったね。

カイ

「（あ、復活した）」

ルナ

「おっかないわね、あの10万ボルトは」

シーナ

「ルテアさんもよくスバルに教えようと思ったわよね」

ルテアはなかなか大胆ですからね。まあ、スバルの押しが強かったのもあるんだろうけど。

シーナ

「押しが強い女の子!」

スバル

「いやあ、照れるなあ」

……。

（はたして、今は誉め言葉なのだろうか……）

ルナ

「（たぶんシーナは誉めてあげてるんだろっけど）」

カイ

「？」

カイ君の趣味は何かな？

カイ

「僕？……スバルと一緒にいることかな」

全員

『!?!?!?!?』

ルナ

「（何!?今の星の停止級の問題発言は!?!）」

シーナ

「（まさか……きゃー!?!?!?!?!）」

スバル

「（エッ……！―ちょっとどういことそれいきなりなんの―！？）」

（いや、たぶん彼は……）

カイ

「あ、あれ……。みんなどうしちゃったの？ 静かになって。だって、僕はスバルと会う前まで里から外に出たことないし友達もいなかったけど、スバルとあってから毎日が新鮮で楽しくて、何よりそばに友達がいるから楽しいよね」

ルナ

「……な―んだ、そういうことね」

シーナ

「カイ君らしいなあ」

スバル

「（驚かせないでよ……）」

カイ君……それは趣味と少し違うような気がするよ。

カイ

「え……そう？」

さて、ルナさん、シーナさん。どうでしたか？カイとスバルとの対談は？

ルナ

「もうちょっと色々聞きたかったわね。なんか物足りないわ」

シーナ

「でも楽しかったです！」

スバル

「私ももつとしゃべりたかったよ」

カイ

「延長できないの？」

時空ホールは長時間開けられませんからね。残念ですが、そろそろお別れの時間です。

ルナ

「じゃあね」

シーナ

「さようなら！」

（二人が時空ホールの中に消えていく）

さて、では時空ホールを閉じて第一回目の対談を締めくくることに

しましよう！

カイ・スバ

「（またあれやんの……？）」

ぴかっとひらめき、さらっとかいけつ！時空ホールうつつ……閉
じよ、塩っ！

第一回 LET・S対談withフレンズ（後書き）

第一回の対談、どうでしたか？

正直期待に添えたものかどうかものかきはビクビクしておりますが、楽しんでいただけたら幸いです。

カイ

「次はどんなポケモンかな？」

スバル

「次があるのかな？」

……ぐさっ！！

カイ

「（あ、倒れた。）では、この辺で」

キャラ紹介3（前書き）

今回はギルド編です。

キャラ紹介3

名前（種族名）：性別／一人称

ルペール（ダンバル）：／ワタクシ

ギルドの門番であり見張り番。

ダンバルという種族柄、口調が抑揚の変化に乏しいが感情の起伏は人並み以上。客の査定の時には「ンナー！？」と唸り、目をギョロギョロさせるので一部のポケモンには怖がられている。名前の由来はルーペ（虫眼鏡）から来ている。

レイ（サーナイト）：／私

ギルドの受付嬢にしてギルド一の嗜好好き。盗み聞きが得意で、周囲の目も何のその、新鮮な情報&嗜好集めに日夜精を出す。

シェフ（ブーバー）：／

ギルドのシェフ。頭の上のコック帽がトレードマーク。ギルド一の古株。無口で気むずかしいが後者の方の真意は謎。耳が遠いのか、彼を呼ぶときは大声を出さないと来てくれない。しかし大声を出すと逆ギレを食らう場合がある。謎多きポケ物である。

マルマン（マルマイン）：／おいら

「コリア」と「コノヤロー」を語尾につける、癖が強いギルドの目覚まし係。

起こしかたはいたってシンプルで、マルマインという種族の特徴を使い「起きなければ爆発する」と脅すだけ。一部のポケモンには多大なる効果がある。

ムーン（エネコ）： / あちし

ギルドの新弟子。「ですます調」ならぬ「ですです調」が特徴。今まではシャナを噂の人として認識していたので本人に会えてご満悦な様子。

シヨウ（ガーディ）： / 自分

ギルドの医療係。年上には「先輩」をつけて、常に敬語を心がけているが、意外に生意気なところもある。大人っぽい。過去の経験からシャナに多大なる尊敬の意を抱いている。彼の前で先輩の悪口はご用心。

リオナ（キュウコン）： / 私

ギルドの雑務や経理などの書類業務担当。仕事が出来るキュウコン。苦労人の負担が軽減されるせいか、ラゴンに信頼されている。すんげえ美人（ポケモンから見れば）で彼女を見たオスは一度は胸を射ぬかれる……らしい。過去にシャナとの交際歴あり。振ったのはリオナ。

ラゴン（サザンドラ）： / 俺

ギルドの副親方および親方代理。色違い。しょっちゅう姿を消す親方に代わり執務をこなす苦勞人。しかし、いざ親方を前にするとグミのちからに屈してしまう。普段は豪気な性格である。

ウイント＝インビクタ（ビクティニ）： / 僕

間延びした語尾が特徴のギルド親方。放浪癖があり、長期間ギルドを空けることもしばしば。グミを配るのが趣味。それなりに親方業務はこなしている。インビクタ家は古く由緒正しい家系らしい。

第二回 LET・S対談withフレンズ（前書き）

今回の対談は本編の第四十話を更新した後に投稿しました。
ちなみにネタバレはありません。

第二回 LET・S対談withフレンズ

どうも、ものかきです。

カイ

「カイです」

スバル

「スバルです」

八月ももう終わりますねー。怒濤の一ヶ月でした……。

スバル

「感慨にふけるのはいいんだけどさ、なんで私たちはまたものかきの禿げた畳部屋に座ってるわけ？」

カイ

「またここに来ようとはね……（ズズ、と湯飲みをすする）」

君たち……ドライ過ぎやしないかい？ちよつとぐらい過ぎ去った青春の余韻に浸ってもいいんじゃないn……。

カイ

「さて、今回僕らがここに呼ばれたのは他でもない」

……って、おい！？人の台詞を取るな！！

スバル

「第二回、Let・S対談withフレンズを行うからだ！！」

カイ・スバ

「パチパチパチパチ！」

うおい！？君たちい！？

カイ

「ほらほらものかき、進めて!!」

あ、はい。（なんだかなあ……）

さて、さっそく時空ホールを開きましょうか!!

ぴかっとひらめき、さらっとかいけつ！時空ホールうつつ……開け！ごまつ!!

（部屋のふすまから時空ホールが開き、そこからヒトカゲ、イーブイ、アリゲイツが出てくる）

ヒトカゲ

「お、着いた着いた！」

イーブイ

「わあ、和室だね、すごい!!」

アリゲイツ

「お、カイにスバルじゃん」

カイ

「やあ」

スバル

「ここじゃ初めましてだね！座って座って！」

ではご紹介しましょう。地味なタカキさんのご紹介で探検隊“ウィングス”のヒトカゲのカズヤ君、イーブイのフィルミィちゃん、アリゲイツのクルード君にお越しいただきました！

カズヤ

「よろしく」

フィルミィ

「よろしくねっ！」

クルード

「それはいいんだけどよ、なんでこんなにボロい部屋で対談するんだ？」

……。

カイ・スバ

「「あちゃー……」」

カズヤ

「あ、ならクルードはかえっていいよ」

クルード

「いや、別にいいんだけどよ」

カズヤ

「さよなら」

クルード

「んだから……」

カズヤ

「さよなら」

クルード

「……泣くぞ」

カズヤ

「どうぞ、そしてさよなら」

クルード

「……（泣）」

スバル

「（こ、これが噂の……クルードいじり……！！）」

カイ

「（恐ろしい……！！）」

フィルミィ

「カズヤ……やめてあげようよ……」

カズヤ

「フィルミィがそう言うなら」

……。

では、今回の対談テーマを発表いたしましょう!!

カイ

「今回のテーマってお任せだよな」

はい、その通り。なので、今回はものかきが勝手に決めちゃいましたよ。

スバル

「うわ……なんか心配……」

今回のテーマはズバリ!!

“覚醒”についてだ!

全員

『は!?!』

フィルミィ

「どうということ?」

今ここに集まったメンバーで覚醒キャラは二匹いますね。

クルード

「カズヤとカイのことだな?」

そう。

本人に自覚全くなしの覚醒キャラ・カイと、任意に覚醒が可能なキャラ・カズヤ君。

ものかきはじめとする読者は、なぜ一貫して覚醒というものに興奮を覚えてしまうのか、覚醒についてとことん語り合いましょう！！

カズヤ

「なるほどね」

カイ

「（僕記憶無いのに……！！）」

ではではさっそく、対談すたーそ！！

カズヤ・クルード

『うおい！』

フィルミィ

「（パクった……！！）」

じゃあ、まず聞きましょう。
“覚醒”をかつこいいと思う人！！
ポケモン

クルード

「はーい！ー！」

フィルミィ

「はーい（正確には“覚醒したカズヤ”がかつこいいんだけど……）」

カズヤ

「はい（フィルミィが挙げてるからいつか）」

スバル

「はい（グイッ）」

カイ

「……えっ（スバルッ！？なに勝手に僕の手を掴んで挙げてんの！？）」

おお、やっぱりみんなかつこいいと思うんですねっ。でも……かつこいいと思う要素は一体何だろうか。

クルード

「そりゃあれだろ、ものかき。“強さ”だよ！」

なるほど！

く覚醒のかつこいい要素その一。覚醒すると、強くなる！く

カイ

「（果たして上にテロップを出す必要があつたの？）」

まず、カズヤの方だけど……。

スバル

「破壊的な強さよね、見てて。どうしてあんなに強いのかな……」

カズヤ

「僕はフィルミイがいるから強くなれるんだ。君は僕が守る」

フィルミイ

「カズヤ……／＼／」

クルード

「でた……！！」

カイ

「……これが噂の……」

カイ・スバ・クル・もの

『バカップルっ！！』

フィルミイ

「……カイの覚醒は謎が多いね」

そーですね。まあ明かされるのはだいぶ後ですが。

クルード

「“もう一人のカイ”は一体何者なんだ？」

カズヤ

「そんな誰でも思うような疑問をいちいち口にするなよ」

クルード

「すいません……」

フィルミィ

「でも……“強くてカッコいい”っていうのはその人で、カイ自身じゃないよね（にこり）」

カイ

「グサアッ！！（突き刺さる何か）」

スバル

「フィ、フィルミィちゃん……！！！」

まあ、それはさておき。

クルード

「さておいちやうのか」

次に参りましょうか。

覚醒キャラに興奮する要素、ほかにはありますか？

スバル

「あれじゃない？ほら、しゃべり方変わるじゃない」

全員

『あー……』

「覚醒のかつこいい要素その二。“口調の変化”」

クルード

「カズヤは一人称が“僕”から“俺”になるな」

カイ

「それでちょっと言動が荒く？なる」

カズヤさん、今覚醒してみてくださいよ。

カズヤ

「やだ。なんでそんなことここでしなきゃいけないわけ？」

……。

スバルさん。よろしくお願いします。

スバル

「はい。フィルミィちゃん、ごめんね（フィルミィに近づく）」

フィルミィ

「あ、えっ……？す、スバルちゃん？ちよ、何をあははははっ！！
ひ、ははははは！」

オス
男

『！？』

スバル

「必殺！！足の裏くすぐりっ！！」

フィルミィ

「あははははッ！！や、やめッ……！！ス、スバルちゃッ……！！」

カズヤ

「……フィルミィに何してやがるッ……！！！」

カズヤ、覚せ……ぐぼおッ！！（カズヤの蹴りを受ける）

カズヤ

「ものかき！！早くやめさせやがれッ！！（双龍紅蓮爪）」

ま、待ってなんでスバルじゃなくてもものかきを……！！
わ、わかった。わかったからいぎゃあああああ！！

クルード

「うお！（やべえ！！ものかきが……！！）」

カイ

「うわ！（小説の続きが書けなくなった……！！）」

スバル

「もういつか。（フィルミイを解放する）」

フィルミイ

「はあ、はあ……！！も、もうスバルちゃんったら……！！」

スバル

「……という風に、カズヤは口調が変わるわけだね」

フィルミイ

「ものかきさん……大丈夫かなあ……？」

ぐっ……じゃ、じゃあカイの方だけど。復活

クルード

「カイは一人称が“僕”から“私”になる」

カズヤ

「正確には中にいる意識が変わるから、“一人称が変わる”っていうのは語弊があるね」 （覚醒解除）

じゃあ、カイ君、是非覚醒を。

カイ

「ええ！？無理だよ！！カズヤ君と違って任意発動できないし……」

クルード君ヨロシク！

クルード

「え……あ、“アクアテール”！（スバルに向かって尻尾を降り下ろす）」

スバル

「きゃあああ！“10万ボルト”！！」

クルード

「いぎゃああああ！（ばたり）」

カイ・フィル

「「あ……」」

カズヤ

「カイが覚醒するまでもなかったね、ものかき」

そうですねえ。

他人行儀

クルード

「ものかきてめえ……!!」

では、覚醒がかっこいい要素。

一、“強くなる”。

二、“一人称、口調が変わる”。

を踏まえ、一般キャラを覚醒させてみましょうか。

全員

『え……!?!』

カイ

「そんなことできんの!?!」

スバル

「どうやって!?!」

フィルミィ

「っていつか誰を?」

カズヤ

「かまこけ」

クルード

「できるわけないだろうが」

……最後の二人、なんか棘があつたね。
ま、いつか。

みなさん忘れたのですか！？ものかきには誰もが恐れるものすごい兵器を持っているではありませんか！！

全員

『ものすごい兵器！？』

説明しよう。これだ！！

作者権限。

く小説を書く者ならだれでも持っている権限。キャラにとっては運命や生死ですらも左右することができる神のような力を持っている。ただし、乱用すると“作者権限”よりも上の存在である“サイト管理者”たるものに除名を食らう恐れがあるので気を付けなければならない。

そう！この権限を使えば、普段覚醒しないキャラでも覚醒させることができるのだ！！

クルード

「えげつねえな、ものかき」

フィルミィ

「怖いね……」

カズヤ

「大丈夫だよ何があってもフィルミィは僕が守るから。最悪ものかきもしばく……」

ごほん!!

スバル

「で？誰を覚醒させるの？」

ふふん、では早速いつてみましょうか!!

Let's 覚醒つ!!

フィルミィ

「きゃああ!!（ばたり）」

カズヤ

「フィルミィ!? フィルミィー!!」

カイ

「フィルミィさんが倒れたああ!!」

スバル

「フィルミィちゃん!？」

クルード

「大丈夫かつ!？」

カズヤ

「てめえ!! フィルミィに何しやがった!?（覚醒）」

ぐぐるじゅ!!（カズヤに首を絞められる）

フィルミィ

「……んう……？（むくっ）」

全員

「！！」

カズヤ

「フィルミィ！！大丈夫か！？」

フィルミィ

「……なにあたくしに気安く触っているのトカゲ！！（カズヤに体当たり）」

カズヤ

「ぐはぁあああ！！！」

全員

『ええええええええ！？』

クルード

「フィルミィどうしちゃったんだ……！？」

カイ

「覚醒中のカズヤさんを吹っ飛ばした……！！！」

スバル

「どういつことなものかき！？」

まあ様子見てことで。

スバル

「こんの……!!」

フィルミイ

「ピーチクパーチクうるさいわよこのブービック共!さあ、わたくしの前にひれ伏しなさい!!」(ブービックファンのみなさんすいません……)

全員

『女王様あああ!?!』

フィルミイの疑似覚醒。

一人称：私 あたくし。

口調：女王様。

フィルミイ

「その人間目障りですわよ!“破壊光線”!」

いぎゃあああああ!!

カズヤ

「僕の知ってるフィルミイじゃない……!!」

スバル

「早くフィルミイちゃんを戻しなさいものかきいひひひひ!!」

カイ

「“破壊光線”受けちゃったんだってー!!」

じゃあ、三人とはそろそろお別れです。

フィルミィ

「えー？もう終わり？」

クルード

「名残惜しいな」

カズヤ

「カイ、スバル。そっちでは色々あると思うけど、応援してるからね、僕たち」

カイ

「ありがとう！！」

スバル

「そっちもね！」

ウィングス

『さよーならー』

（三匹が時空ホールに消える）

では、今回もあの言葉で締めくくりましょう！！

ぴかっとひらめき、さらっとかいけつ！時空ホールうつつ……閉

じょー！塩っ！

第二回 LET・S対談withフレンズ（後書き）

キャラ崩壊しません；

第三回 LET・S対談withフレンズ

どうも、ものかきです。

カイ

「カイです（ちらり）」

スバル

「スバルです。……三度目の畳部屋だね（ちらり）」

シャナ

「（視線が痛い……）……なぜ俺もいる？」

いやあ、それは君も対談に参加するためでしょう。

カイ

「それならますます、ものかきの部屋じゃ窮屈じゃん」

スバル

「いつもより狭く感じる」

シャナ

「……悪かったな。どうせバシャーモは身長が190センチだ」

……きみたち、ものかきの部屋に文句をつけるつもりかい？

三匹

『その通り』

……。
なかなか傷つく。

さて、今回きみたちを呼んだのは他でもない！

シャナ

「対談……だろう？」

第三回LET・S対談with……って、シャナ！お前空気を読めよ！！

シャナ

「ものかき、湯飲みが小さい」

……。

第三回LET・S対談withフレンズを行うからだ！！

カイ・スバ

「「ぱちぱちぱち」」（口頭）

シャナ

「ズズ……」（湯飲みをすする）

……君たち！！テンションアップして！

シャナ

「いいから時空ホールを開け」

……ぐすん、いいもーん。対談相手呼んだらみんなテンション上が
ってくれるはずだもーん。

ぴかっとひらめき、さらっとかいけつ！時空ホールうつつ……開
け！ごまっ！！

（時空ホールが開いてそこからリオル、チコリータ、ロコンが入っ
てくる）

リオル

「……」

チコリータ

「着いたー！」

ロコン

「あれ、この部屋……話で聞いていたのよりなんか狭くないかしら
？」

シャナ

「……」

いや、いつもと同じですよ？

では紹介しましょう。レインさんのご紹介でリオルのゼロくん、チ
コリータのリーフちゃん、ロコンのシオンさんにお越しいただきま
したー！！

ゼロ

「……」

リーフ

「よろしくね」

シオン

「ちよつとゼロ、何か言いなさいよ」

ゼロ

「……どうも」

ゼロ以外

『テンション低っ！！』

え、えーっと……あはは！ではさっそく対談テーマと参りましょうか！（やべえ、プレッシャー半端ねえ……！！）

カイ

「（このあとどうやってテンションを上げていくのか……）」

スバル

「（ものかきの腕の見せどころだね）」

さて、今回の対談テーマはズバリ！！

“チームワーク”についてだ！！

リーフ

「チームワーク？」

そう！

君たちは探検隊というチーム！！

“チームワーク”とはなんなのか、君たちはどれぐらい仲が良く、連携がとれているか、この場で徹底検証したいと思います！！

リーフ

「わあ！」

シオン

「おもしろそうっていったらおもしろそうね」

スバル

「頑張ろうね、カイ」

カイ

「え、あ、うん（何を？）」

ゼロ

「……（帰りたい）」

シャナ

「……俺のチーム、今俺一匹だぞ」

シャナはカイたちのチームに入ってね。

ゼロ

「……チームワークなんて曖昧なものをどうやって検証するつもりだ？」

お、いい質問だねゼロくん。

君たちの精神的なチームワークは、さすがに対談では図りきれない。それならば連携の方を検証しよう、ということ、こんな企画を用意した！！ズバリ……？

LET'S volleyball!!

全員

『……はい？』

皆さんには、バレーボールをしてみらおうと思います！！

カイ・リーフ

「え、ええええ！？」（とりあえず雰囲気を押される組）

スバル・シオン

「ものかきの部屋じゃ無理でしょ」（冷静組）

シャナ・ゼロ

「……」（興味ない組）

シオン

「なんでよりもよってバレーボールな訳？」

シャナ

「それよりも、まず」

カイ・リーフ・シャナ

『 バレーボールってなに（なんだ）？ 』

ああ、元人間じゃない組はバレーボールの存在を知らないんですね。説明しよう！

バレーボール

　球技。もとは6人でやる競技で、ボールを地面に落とさずに三回以内でネット越しの相手陣地に落とせば点が入る。なお、同じ人がボールを二回触ってはいけない。

チームは両者ともに三匹！つまり一回は全員がボールに触らなければいけないわけで、自然と両者のチームワークが問われるわけだ！！

シオン

「いったいどこでそんな大がかりな競技をやるっていうのよ？」

スバル

「ものかきの部屋でやったら部屋が崩壊するよ？」

では、この部屋の上の階の屋上へ参りましょう！

カイ

「屋上あったの！？」

はい、ここがものかきの家の屋上でーす。

リーフ

「うわー！」

スバル

「床が……」

ゼロ

「……緑」

シオン

「あんまり、広くない……」

シャナ

「これ、もしボールを落としたら、道路に落ちるパターンか？」

そういうリアルな話は無しの方で。

じゃあ、さっそくやつてもらいましょう！ネットはもう張ってあるので、コートに入ってください！！

カイ

「なんだかなあ」

（全員がぶつぶつ言いつつコートイン）

さて、では試合を始める前にいくつか説明を。

まず、四足歩行のリーフちゃん、シオンさんのお二人は頭（草）や尻尾でボールをあげて結構です。

シオン

「よかつた」

リーフ

「よくわかんないけど、了解」

そして、問題はシャナ!!

シャナ

「なんだ」

君は アタック禁止!

スバル

「えゝ!?!なんで!?!」

カイ

「アタックつてなに?」

ゼロ

「ボールを相手の陣地に送るための攻撃手段」

その通り。

シャナはメンバーのなかでも飛び抜けて身長が高い!なので点がガツポガツポ入ってしまう可能性大!

リーフ

「それより、シャナさんがボールを叩いたら破裂しちゃっよ?」

……以上の二点を踏まえ、シャナにアタックを禁止します。

シャナ

「よくわからんが、わかった」

ゼロ

「……結局どっちだ？」

では、さっそく五点マッチでやりましょう！サーブはゼロくんから。

LET'S volley ball!!

（ものかきがホイッスルを吹く）

ピーッ!!

ゼロ

「……行くぞ」（きれいにサーブ）

さあ、ゼロくんが放ったサーブがきれいな放射線を描いて相手陣地に入っていく!!

スバル

「来た！任せて！」

おっとここでスバル！落ちるボールにうまくあわせて……トス！
ここはレシーブの方がよかったような気がするが!?

スバル

「しょうがないでしょ!!腕短いんだから！」

さあ、ピカチュウの戯れ言はさておき、トスされたボールはまっすぐシャナの元へ！

シャナ

「ほら、カイ」

シャナはカイにレシーブ！さあカイ、こぼさずに行けるか！？

カイ

「わ！わわ、どうしようッ！？どうすればいいのぉ！？」

スバル

「とにかく落とさないでー！！」

カイ

「そんなことを言われたって……ええい！！」

な、なんと！へっぽこ主人公カイがバックレシーブでボールを返したぞッ！？

シオン・スバル

「「えええええ！？」」

ゼロ

「ぼさつとするな、リーフ！」

リーフ

「は、はい。シオンよろしく！」

リーフちゃんが頭の葉っぱで見事にレシーブ！シオンさんにボール

がいったぞ!?

シオン

「ゼロ!! 決めてよね! はい!」

そして、シオンさんからゼロくんがボールが行った! さあ、どうする? ゼロくん!!

ゼロ

「(なんだか、やけに体がうずく……俺は、楽しんでるのか?) ……くられ!!」

ゼロくん、アターーック!! (不可視な速さで相手の陣地にアタックが炸裂した)

シャナ

「な……」

スバル

「あつ!」

カイ

「わあつ!?!」

ビー!! ゼロくんのアタックが決まりました!! チーム“スカイ” 一点入ります!!

シオン

「やるじゃない、ゼロ!」

リーフ

「やったねっ！」

ゼロ

「……（この競技……こんななに燃えるものだったのか）」

スバル

「先制を許しちゃった！すぐ取り戻すよー！！」

カイ

「やっていける自信（と体力）が無い……」

シャナ

「スバルが燃えてる……なんか嫌な予感がするな……」

さあ、再びゼロくんのサーブで試合開始です！
ビーツー！！

ゼロ

「行くぞ」（無難なサーブを放つ）

カイ

「わあっ！？」（危なっかしいレシーブ）

シャナ

「よっ。……スバル！」（トス）

スバル

「うりゃああッ……」

“スカイ”

『えええええ！？』

ビーツ！！

スバルがヒロインとは思えない叫びでアタック！まさかピカチュウがあんなアタックをできると思っていなかったチーム“スカイ”、誰も取りにいけないかったぞ！

一対一の同点！勝負はわからなくなってきた！！

スバル

「燃えてきたー！！」（趣味：運動）

シャナ

「落ち着けスバル……」

ゼロ

「……！（……スバル、やるな）……二人とも、手出しするな」

リーフ・シオン

「はあああッ！？」

リーフ

「な、なにいつてんのゼロ……」

シオン

「バレーボールはチーム戦よ！また単独行動！？」

えー、両者とも試合再開していいですか？スバルのサーブで試合再開！

ビーツ！！

スバル

「行くよーッ！やあッ！」（なかなかのサーブ）

ゼロ

「思い通りにさせるか！」

おおおっと！？なんと、ボールが落ちるところに一番近いのはリーフのはずだが、ゼロがそこに向かって走る！？

リーフ

「はぁ……ゼロ……」

シオン

「これもうダメねえ……」

ゼロ

「くらえッ！！カウンターだ！！」

おッ！？ゼロが一度で相手陣地にボールを鋭く返したあッ！！

スバル

「師匠おッ！！拾ってえええッ！！」

シャナ

「お前な……」（スライディンググレシーブ）

スバル

「うりゃッ！」（アタック）

カイ

「あれっ……僕にボールは？」

ゼロ

「させるか……ッ!!」(カウンターで相手に返す)

スバル

「拾ってえええ!!」

カイ・シャナ・リーフ・シオン

『……』

おーっと!!ここですでにチームワークに亀裂がああッ!!
チーム“スカイ”のリーダー・ゼロがまさかの単独プレー!!

リーフ

「もう……ゼロったら……」

シオン

「毎度のことね……」

一方“シャインズ”は燃えてきているスバルが師匠をこき使いつつのプレーだッ!!師匠としては複雑な心境でしょう!!

シャナ

「……」

カイ

「スバルが暴走してる……」

さあ、わからなくなってきたチーム対抗バレーボール！！果たしてどちらが勝つのk……。

スバル

「ものかき危ないッ！！」

ごいんんッ！！

んぎゃっ！？（ばたり）

リーフ

「ものかきさんが倒れたああああ！！？」

シオン

「だ、誰が投げたボール！？」

カイ

「ちょ、誰かー！！」

シャナ

「……ゼロのアタックがものかきの脳天にヒットお。さあ、どうするどうなる？」（棒読み）

カイ

「シャナさんっ！ものかきが気絶していい気味だからって、日ごろの鬱憤晴らしに実況しないでください！！」

スバル

「ものかきはほっというて続けましょ？」

ゼロ

「ああ」

カイ・リーフ・シオン

『ちよつと待てえええいッ!!』

しばらくお待ちください。

……ふう、やっぱりバレーボールは、チームワークが如実に表れま
すね。

シャナ

「とばっちりくらったからって嫌そうに言っなよ。」

さて、試合は中断されてしまいましたが、“スカイ”メンバーとは
そろそろお別れです。

リーフ

「えー!?!」

シオン

「試合まだ終わってないのに……」

ゼロ

「……おあずけか。スバル、次に決着をつける……！！」

スバル

「望むところだよ!!」

スバル・ゼロ以外

「勘弁して……!!」

リーフ

「じゃあねー」

シオン

「なんだかんだ楽しかったわ」

ゼロ

「……じゃあな」

さて、では今回もあの言葉で締め括りましょう！

ぴかっ　と　ひらめき、　さらっ　とかいけっ！　時空ホール　う　う　う　……　閉
じょ！　塩っ！

第三回 LET・S対談withフレンズ（後書き）

ちよつとやりすぎたような気がします……そこは気にしないことにします。

第四回 LET・S対談withフレンズ

どうもー、ものかきです。今回はシャナと、対談初参加であるルテアに来てもらっています。

シャナ

「……ものかき」

はい、なんでしょう？

ルテア

「ひとつ聞きたいことがある」

だから、なんでしょう？

“爆炎槍雷”

「「ここはどこだ？」」

あー……そういうこと。

シャナ

「いきなり俺たちをものかきの部屋に呼んだかと思えば」

ルテア

「いきなり時空ホールに俺たちを放り込み」

シャナ

「気づけば俺が全力で跳躍しても届かないぐらい高い天井の広間に座っていたんだぞ？」

ルテア

「説明しやがれ。答え方によっては、お前は黒こげになるぞ?」

……。 (二匹の野郎に脅されて冷や汗なものかき)

わかった。説明するから睨まないで……。君らの眼光やばいぞ。

ルテア

「それで? Where are here?」 (恐ろしい笑顔でものかきにつめよる)

???

「その質問は私が答える」

(広間の入り口の豪華絢爛な扉が開かれ、ボーマンダを強引に引っ張りながら色違いのフライゴンが入ってくる)

ボーマンダ

「ま、まで!! 説明は無しかっ!? 俺なんかがこんなところに足を踏み入れていいわけ……!!」

フライゴン

「ここはカトラル城だ。うちの作者が対談をここですたいと言い出した」

ルテア

「……だれ?」

紹介しましょう！砂漠の蜻蛉さんのご紹介で、用心棒のルークさんと、薬草師であり、まじない師見習いのシグラさんです。
カトラル城で待ち合わせしてました！

シャナ

「カトラル城？」

七氏族が治めるカトラル王国の王都・カトリシアに構える城のこと。
王様や使用人が住んでるよ？

ルテア

「ま、待てッ！！王がすんでる城に俺たちは時空ホールから不法侵入したってことかよ！？」

やだなあ、不法侵入だなんて　ねえ、ルークさん？

ルーク

「国王であるラーク・セレンにはすでに許可をいただいた」

シグラ

「お前、実の兄をそんな他人行儀」

ルーク

「“ドラゴンクロー”」

シグラ

「うわっ！ま、待てッ！！わかった！！」

ええっと……。話進めていい？お二人さん。

シグラ

「ふう……でも、なんでしがない薬草師である俺までカトラル城に招待されたんだ？」

シャナ

「俺らも招待されるような身分じゃないしな」

ふふ……君たちをここに呼んだのは他でもない。スバリ……！！

第四回、LET・S対談withフレンズ（innカトラル城）を行うからだ！！

今回は初の出張編だぞッ！！

シャナ・シグラ

「出張……」

ルーク

「しかし、作者どもは物好きだな。こんなむさ苦しいオスだけでカトラル城を借りつつ対談をしようなど……」

ルテア

「しかもこちら側は主人公を差し置いてな」

まあ、作者権限で女性を加えてもいいですよ？……リオナかハンナで。

シャナ・ルーク

「「却下」」

ほら。だから今回はオス同士で酒をのみ交わしつつ語り合おうではないか！！

ルテア

「酒ッ！？」（喜）

ルーク

「酒だと……？」（渋）

シャナ

「ものかき……お前酒飲めるのか？」

……。

では今回の対談テーマを発表しましょう！

シグレ

「無視した；」

テーマはずばり……？

“親友”についてだッ！！

全員

『……はい？』

君たちはお互いに親友同士でしょうが！素直じゃないから面と向か

って言えないでしょうけど。
で、今回の対談では親友の定義や、お互いの絆の深さ、その他もろもろを語ってもらう。

シャナ

「ものかきに親友はいるのか？」

……。

では早速進めていきましよう！みなさんお酒の準備はできていますか！？

ルテア

「万端だぜ！！」

ルーク

「（ぼそっ）私は酒が飲めないのだが……」

シグラ

「見事にまた無視したな！」

ではまず、親友の定義について。どうなれば“親友”になるんでしょうかね？

シャナ

「またそんな曖昧なものを……」

シグラ

「哲学的なテーマじゃないか（ぐびっ）」（早速吞んでる）

じゃあ親友を辞書でひいた定義を載せておきますね。

親友「名」くうちとけて付き合っている友。英語（best friend）

ルテア

「ますますわからん（ぐびっ）」（煽りまくる）

ルーク

「親友なんて、簡単に『はい』といって決まるような浅いものではないと思うがな」

シャナ

「周りが『こいつらは親友だ』と認めたら、親友か？」

自分達が認めていなくても？

シグラ

「周りの目も確かにあるだろうが、お互いが認識していなければ意味がないんじゃないか？もしかしたら、周りはなかが良さそうに見えるても、自分達はそうじゃないかもしれない」

自他共に、というわけですか？

ルテア

「それよりもまず、お互いが絡んで気が合えば……気がねなく自然体でいられる仲が“親友”じゃないのか？」

なるほど。

シャナ

「本当に困ったときに助けしてくれる仲とか」

ルーク

「あんまりお節介は問題だな」

ああ……だんだん“親友”の条件が厳しくなっていけますねえ。

シグラ

「やはりお互いが心のどこかで親友だと認めていれば、親友じゃないか」

シャナ

「一方的ではなくてな」

ルークさんとシグラさんは、いつからお互いを“親友”だと認識し始めたんですか？

シグラ

「いつから……？？物心ついたときからか？」

ルーク

「出会った当初はそうでもなかった。だがシグラはあまり物事を詮索しないから、こちらは気が楽だったな」

シグラ

「ルークは俺が薬草師になるきっかけ？だったな」

ルーク

「なぜ疑問系？……まあ、私とシグラは相性がよかった……というべきか」

ほう。

一方で、シャナ&ルテアは……。

ルテア

「俺たちはガキの頃からの幼馴染みだったからな」

シャナ

「出身地が同じだし、長い付き合いになるうちにいつのまにか……
つてわけだ」

しかし、いくら付き合いが長いからといって必ずしも“親友”……
とはいかないのでは？

ルテア

「……それもそうだな」

シャナ

「お互いの相性が悪かったら離れていくばかりだ」

なるほど、キーワードは“相性”ですか。

シグラ

「確かに、親友には運命的な要素も入ってるかもしれないな」

ルーク

「とは言っても、ある程度の妥協と礼儀は必要だ。親友だからといって、なんでもしていい訳じゃない」

シグラ

「お前が言うか？俺の足の腱を切ったくせに……」

“爆炎銃雷”

「「腱を……切った……？」」（汗だらだら）

ルーク

「……あ、あれは不可抗力だッ」

シグラ

「あー、はいはい」（お互いに言い合いを始める）

シャナ

「……まあ、親友というのは探して見つかるというものではないが、自分自身が誠意をもって接していれば、あるいは親友と呼べるパートナーとの出会いがあるかもしれない」

ルテア

「逆に、いまもしかして馬が合わなそうだなあ、と思う奴がいたら、うまい具合に距離をおいた方がいいかもな……わかったかものかき？」

は、はい、そうですね……。

ルーク

「だからあのときは……！」

シグラ

「だいたいお前は……！」

二人まだ言い合ってるよ；

ルテア

「ま、仲がいい証拠だな」

ルテア

「ん？……おい、酒切れちまったぞ」

ルーク・シグラ

「なにっ！？」「」

酒は十分用意していたはずなんですけどねえ。
(苦笑)

シャナ

「ルテアはザルを越えてワクだからな」

シグラ

「いやそれにしたって……」

ルーク

「飲みすぎだぞ……」

確か……ここに予備の酒が……あ、あつたあつた!!さすが、カトル城の酒の貯蔵量は違いますねえ。

シャナ

「おい、瓶に何かついてるぞ?」

ん……これは、書きつけかな?なにになに……?

『この酒瓶に手を出してるということは、対談は弾んでいるようだね。弟に酒を飲みながら語り合える友達がいるとは、兄として嬉しい限りだよ。』

ものかきさん、弟とその親友をよろしく頼みますね。

そうそうルーク、間違っても酔ったりして槍を振り回さないようにね。

ラーク・セレン』

……お兄さんは気が利いてるね。

ルーク

「まったくあの人は……!!」

シャナ

「いやものかき、国王に何て言いぐさだ…」

シグラ

「まあ、酒があつたからいいか」

ルテア

「……ルークは槍を使えるのか？」

ルーク

「しょせん真似事だ」

やだねえ、謙遜しちやって！こうなつたら見てみたいですね、ルークさんが槍を振るうところを。

ルーク

「お、おいっ！！」

ルテア

「お、いいねえ」

となれば、やられ役がいなければ。

シグラ

「やられ役………」

もちろん……。

ルテア

「やられ役は………」

もの・ルテ

「「シャナ、ゴー！」」

シャナ

「俺かよ!!」

ルテア

「お前以外に誰がいる？」（趣味：シャナいじり）

ルーク

「い、いいのか……？」

遠慮なく ちゃんと訓練用の槍もありますし。

シグラ

「いつの間に……」

シャナ

「俺の意見は無視かッ!？」

ではルークさん、一ノ式をよろしくお願いしますよ。

シャナ・シグラ

「「本当にやるのか。」」

ルーク

「もう知らんぞ。」

一ノ式、けつが月牙」

（槍の先が消える）

シャナ

「うおわッ!？」（飛び退く）

ルーク・シグラ

「「避けた……!？」」

ルテア

「……月牙って?なんだ?」

説明しよう!

月牙

「カトラル式槍術の基礎の一。カトラル軍に入ったらまず始めに叩き込まれ、使いこなせるようになると矛先が消えたように見えるス पीード重視の型のこと。」

シグラ

「あいつの月牙はほぼ不可視だぞ!?!それを避けるって……化け物か!?!」

ルテア

「ルーク！もつとやれーっ！！ボコボコだー！！」

シャナ

「おいっ！！てめえ……！うわっ！？」（目の前を槍がかすめる）

ルーク

「やるな、これならどうだ」（槍を手のなかで一回転、猛攻撃）

シャナ

「ま、待て！ちよっ……！？」

ルテア

「そういえば、こつちの世界ではバトルは技重視じゃないのか？」

シグラ

「場合によるが、技はほとんど使われないな」

なんか、技は王道じゃないみたいだね。だから、時と場合によっては技を使うと卑怯に見られることもあるみた…

シグラ

「あ、そういえば前にルークが“確実にしとめるため”っていったな」

ルテア

「ふーん」

まあとにかくk（ごいんっ！！）

ぐふうつ！？（ばたん）

シャナ

「やめさせろって言うてるだろうものかきッ！……はぁっ……はぁっ……」（肩で息）

ルーク

「それ以前に、ものかき気絶したぞ？」（冷静）

ルテア

「無視して吞もっぜ」（しれっ）

シグラ

「無視するのか……」

えー……。そろそろお別れの時間ですね。

ルテア

「なにっ！？まだ飲み足りないぞ……」

シグラ

「まだ飲むのか……」

シャナ

「ほら、わがまま言っでないで行くぞ」（尻尾をつかむ）

ルテア

「いでででッ！！てめえ尻尾は……！！」

ルーク

「土産の酒だ。持っていけ」

あ、どうもどうも。

じゃあ、行きましようか。

ルテア

「じゃあな」

シャナ

「楽しかったぞ」

それでは、また会う日まで……あ、そうそうシグラさん。

シグラ

「なんだ？」

ものかきが去ったら、あのまじないをかけてくださいよ。

シグラ

「え、俺？」

うん。だって、いつもはものかきが閉じるんですけど、こちら側で閉じる人がまじない師であるシグラさんしかいないんでね。
では、さよーならー。

シグラ

「まったくしょうがないな……」。

ぴかっ　と　ひらめき、　さらっ　と　かいけつ！　時空ホール　う　う　う　……　閉
じよ！　塩っ！　」

ルーク

「……なんだそのふざけたまじないは？」

キャラ投票すんの!?

はい、ものかきです。

カイ

「カイです」

カイくん……。

カイ

「なんだいものかき?」

お気に入り登録件数が十件超えたら何をするか……覚えてる?

カイ

「まさかものかき……!!」

ああそうさ!

第一回、人気キャラ投票を行いたいと思う!!

カイ

「うわああああ!!だめだ票なんか入らないいいいい!!」

いや、何を言い出すんだへっばご主人公;
いいんだよ。一回やりたかったんだから。

カイ

「まだ三ヶ月しか経ってないのに。時期尚早すぎやしないかい？」

いいんだよ。

さて、では投票方法を説明しましょうか。

- ・一人の持ち票は五票です。

- ・票の振り分けは自由です。

- ・投票するキャラは、この説明の最後に載っているキャラリストからお願いします。（一応第四章までのキャラです。近々四章までのキャラ紹介を完成させますので、そちらも参考にしてください）

- ・投票する際、理由も一緒に付けてくれるとうれしいです。出来るだけお願いします。

- ・投票はメッセージからお願いします（無理な方は感想からでも結構ですが、感想と投票を別の感想にしてくれるとうれしいです。もしかしたら、バレルのを防止するため投票の載っている感想を削除するかもしれません）

- ・注意：思いのほか票が集まらなかった場合、開票を中止する可能性があります。

- ・締め切りは9月23日（金・祝）までです。

……これぐらいかな？

カイ

「はぁ……お先真っ暗」

ええええ！？ひどつ。

みなさん、どうぞ投票をお願いします！もれなくものかきと票をもらったキャラが泣いて喜びます！

カイ

「みんなにハンカチ準備するように言っておかなきゃ」

投票お待ちしています！
では次回！

キャラリスト

- ・カイ（リオル）
- ・スバル（ピカチュウ）
- ・シャナ（バシャーモ）
- ・ルテア（レントラー）
- ・リン（ハクリュー）
- ・ヤド仙人（ヤドキング）
- ・プワプワ（フワライド）
- ・ローゼ（フローゼル）
- ・ミーナ（シェイミ）

- ・長老（シェイミ）
- ・アリシア（クレセリア）
- ・クーガン（スカタンク）
- ・バソン（バクオング）
- ・ダークライ
- ・“もう一人のカイ”

- ・ルペール（ダンバル）
- ・レイ（サーナイト）
- ・シェフ（ブーバー）
- ・マルマン（マルマイン）
- ・ムーン（エネコ）
- ・ショウ（ガーディ）
- ・リオナ（キュウコン）
- ・ラゴン（サザンドラ）
- ・ウィント＝インビクタ（ビクティニ）

- ・サスケ（ワルビアル）
- ・カガネ（ドクロツグ）
- ・ギンジ（ズルズキン）
- ・フォン（フーディン）
- ・ラング（カメックス）
- ・ランティフ（バンギラス）

以上！

キャラ投票すんの！？（後書き）

よろしく願います！

第五回 LET・S対談withフレンズ

九月に入りましたね、ものかきです。

カイ

「カイです……」(眠)

スバル

「スバルです……」(眠)

ど、どうしたんだい二人とも!?

カイ

「はあ……今本編が忙しいんだよ……」

スバル

「なんで私たちがものかきの家に呼ばれなきゃいけないわけ?」

君らしばくぞ(怒)

相手を待たせてるんだよ、早く眠気を覚ましやがれ。(二人の前に湯飲みを置く)

カイ

「あ、カゴ茶だ(ズズ……)」

スバル

「眠気覚ましって訳だね(ズズ……)……あっっ」

よし、二人が眠気を覚ましたところで!

今日君たちを呼んだのは他でもない！！

カイ

「その決まり文句まだやるんだ；」

スバル

「いい加減言わなくてもわかるよ」

やかましいっ！ものかきの数少ない台詞なんだよっ！ええっと、どこまで言ったつけ……？あ、そうだ。

第五回 LET・S対談withフレンズを行うからだ！！

カイ・スバ

「ズズ……」

……わかってるよー……もう相手にされなくても傷つかないよー……。

カイ

「傷ついてるじゃん」

スバル

「なんでもいいから対談相手と呼ばう？」

はい。

ぴかっとひらめき、さらっとかいけっ！時空ホールうつつ……開け！ごまっ！

（ふすまから時空ホールが開いてピカチュウ、ズルズキン……マグガルゴが入ってくる）

ピカチュウ

「おお……時空ホールを渡るのは私にはこたえるなあ……」（腰を叩く）

ズルズキン

「こんなところでリアルな発言やめてくださいよ……」

マグガルゴ

「あ、ものかきさんご無沙汰してます」（ぺこり）

あ、どうもどうもノコタロウさん。（ぺこり）

カイ・スバル

「ええええええ！？作者さんっ……！？」

そう！

今回はノコタロウさんのご紹介でピカチュウのスパークさん、ズルズキンのルッグさん。そしてご本人の意向によりノコタロウさんはマグガルゴとしてご参加いただきまーす！！

スパーク

「まったく、うちの作者は……はっ」（鼻で笑う）

ルッグ

「本当に……マグガルゴなんていい趣味してますよ……はっ」（同じく）

ノコタロウ

「待てい！―君ら自分の作者になんて物言いだゴラァ！？抹消するぞ！―」

ルッゲ

「何をおっしゃっているんですかあなたは」

スパーク

「お前ここにマグガルゴの“キャラ”として来たってことは、作者権限一時放棄だぞ？」

ルッゲ

「さあて……ノコタロウへたまった日頃の鬱憤を……」（バキボキ）

スパーク

「もちろんなんにも言わないよなあ？」（ビリビリ）

ノコタロウ

「ま、待ちたまへ二人とも！？キャラなんか変わってない！？君ら僕に手を出したらどうなるかわかってやってるんでGESか！？」（必・死）

カイ

「スバル……僕ら蚊帳の外だね」

スバル

「そうだね、見てて楽しいけど、ものかきは止めないの？」

……カイ君。この紙に書かれたのを読みながらスパークさんに抱き

ついてきなさい。

カイ

「え、いいの？」

はやく！

カイ

「は、はいっ！」

スバル

「あの紙なに？」

まあ、みててね。

スパーク

「さあノコタロウ準備はいいか？」（悪魔の笑み）

ルッグ

「ぼこぼこにしてあげますよ」（天使の笑み）

カイ

「えーっと……お、お父さんっ！おねがいつ、誰かが傷つくところ
は見たくないよおっ……！（ぎゅっ）」（スパークに抱きつく）

スパーク

「うおおっ！？（……な、なんだ……？父性本能を刺激されるこの
感覚はッ……！？）」（顔火照り）

ルッグ

「何をしているんですか？」

ノコタロウ

「た、助かった……！！」

スバル

「カイに何やらせてんの？」

ノコタロウさん救済計画、名付けて“カイのハグでスパークさんの戦意を削げ”作戦！

ルッゲ

「僕の戦意は削がれていませんか？」

……スバルよろしく。

スバル

「ルッゲさん？私と一緒にお茶しながら話ませんか？あなたの探検の話が聞きたいなあ」

ルッゲ

「え……今こそノコタロウへ飛び膝蹴りのチャンスなんですけど……！！」

スバル

「ダメ……ですか……？」（うるうる）

ルッゲ

「う……そ、そんなこと言われて断れる　はいないじゃないですか……／＼／」

ノコタロウ

「ありがとうございます、ものかきさん。危うく自分のキャラに殺されそうになるところでした……」

まあ、こちらとしてはマグガルゴであるあなたに逃げられ続けたら、禿げた畳が大変なことになりますからねえ。

ノコタロウ

「……あ……そうですね……」

ちなみにスバルの方の作戦は、“スバルのお色気”作戦d（スパアアン）

ぐふうつ！？

スバル

「誰がお色気だ、誰が……！」

は、ハリセンん……！！

さて、では今回の対談テーマを發表しましょう！ズバリ……！！？

親（もしくは親代わり）についてだッ……！！

全員（もの・ノコを抜く）
『はい？』

まあ、今回は親父さんもいるってことですね、親が子に思っていること、子が親に思っていることを色々知りたいじゃないですか。

ノコタロウ

「ここにいる親父はただの飲んだくれだけだね」

スパーク

「やかましいわ（ぐびっ）」（ちゃぶ台におかれたお猪口を煽る）

ルッゲ

「とか言いつつ、もう勝手に手が出てますよね……焼酎に……」

スパーク

「ぐっ……」

カイ・スバ

「……」

ま、まあとにかくまずは子が親に思っていることをぶちまけましょうか。

スバル

「私……記憶喪失なんだけど……」（しゅん）

カイ

「僕も親が生きてるかどうかもわかんないけど、リンがいたね」

ルッグ

「親代わりですね」

カイ

「リンは怒ると怖かったよ……」

ノコタロウ

「でも、親が怒るのはその子供のためを思ってますよね」

カイ

「それはわかってるんだけどさ……リンは興奮したら……雷を落とすんだよ……技のね……（ガクブル）」

全員

『かみなり……!!』

しかし、親の方からすれば子供が大変なのは反抗期の時期ですよ？

スパーク

「まあ、そうだな。親の心子知らずというか……」

スバル

「でも……ルッグさんは反抗期が来てなさそうですけど？」

カイ・ノコ

「あゝ、確かに」

ルッグ

「ふふ……どうでしょうかね？」

え……まさかあったの？

ルッグ

「それは……秘密ですw」

カイ

「ルッグさんの反抗期!？」

スバル

「想像できない……!!」

スパーク

「でもよう……俺たち親は子供のためを思ってたのに……!
!みんな理解してくれないんだよ……!!ぐすっ、うおあっ……
!」(ちゃぶ台につっぱす)

え……なんかスパークさんのテンションが……!?

ノコタロウ

「こいつこんなキャラだっけ？」

ルッグ

「泣き上戸ですか?……さあ知りません」

カイ君、抱きついて慰めてきなさい。

カイ

「やだ」

スバル

「えっ……！？」

なんで！？抱きつけるんだよ！？

カイ

「だって……酒臭いもん」

スパーク

「ぐさあッ！！ぐっ……！！精神的なショックで関節が……！！」

スバル

「でもさあ……“家族”ってなんだろうね？」

全員

『え……！？』

ノコタロウ

「どうしたのスバルさん……？急に」

スバル

「だから私は記憶喪失だから、家族とかよく知らないんだって」

スパーク

「それはいかんッ！！」（バァン！！）

カイ

「うわあっ!？」

ルッゲ

「なぜいちいちやぶ台をひっくり返すんですか!!（飛び膝蹴り）」

スパーク

「ぐはあっ!？」

ルッゲ

「僕が酔いを覚ましてあげましょうか？」

スパーク

「も、もう覚めたありがとうすまん!」

ノコタロウ

「時に親父」

スパーク

「なにぞ？」

ノコタロウ

「なぜちやぶ台をひっくり返した？」

スパーク

「スバルには家族の温もりを知ってもらわなければならん!人生を半分損しているッ!」

……んじゃ、疑似家族作ってみます？

全員

『……はい？』

親父、スパークさん。

スパーク

「お？おお……」

お母さんはルッグさんで。

ルッグ

「え？僕 ですか？なんでお母さんなんです？見た目はヤクザなんですけど僕」

はい、これがあれば大丈夫さ！（ルッグに何かを手渡す）

ルッグ

「なんですかこれ？」

お玉と割烹着。

ルッグ

「……」

カイは弟役ね。

カイ

「ん？」

ノコタロウ

「あ、あの……僕は……？」

近所のお兄さん。

ノコタロウ

「……なんで？」

……眼鏡かけてるから？（ものかきもだけど）

ノコタロウ

「……」

ではスバル、一旦外に出て！（ぐいっ）

スバル

「な、なんで〜！？」

みななもの！準備に取りかかれえい！！

全員

『（なんだこのテンション……？）』

スバルさん、もういいですよ！

スバル

「は、はい（何が起きるんだろっ……？）」

ルッグ

「あ、おかえりなさいスバル」

スバル

「え、ええええ……？どうしちゃったんですかルッグさん……？」

ルッグ

「る、ルッグさんじゃありませんっ！お母さんでしょ！？（おたまを振り上げる）」

「さあ、お腹すいたでしょ？ごはんにしましょ（くっ……！！こんな死にたいと思ったことはありません……！！）」

スバル

「……」

カイ

「あ、おかえりお姉ちゃんっ！！」

スバル

「（ゾクッ！！）か、カイ……！？」

カイ

「お姉ちゃん、今日探検どうだった？」

スバル

「え？あ、え……いつもと同じかなあ……」

ノコタロウ

「あれ？スバル帰ってたのかい？」

カイ

「あ！隣のお兄ちゃん！！」

スバル

「と、隣のお兄ちゃん！？」

ノコタロウ

「どうしたんだいスバル、そんなに驚いたような顔して」

スバル

「……い、いや……（まずい、違和感ハンパない……！！）」

ガチャツ。（扉が開いてスパークが入ってくる）

スパーク

「いやあ、疲れた疲れた！」

カイ

「あ！お父さん！（ギュッ）」（スパークに抱きつく）

スパーク

「ははは！甘えん坊だなあ、我が息子は。（……絶対にウォーターとファイアには言えん……！！）」

スバル

「……」

スパーク

「スバル、帰ってたのか！」

ルッゲ

「スバル？お父さんに一言かけたらどう？」

スバル

「え……お帰り」

スパーク

「……そっけないなあ我が娘は」

スバル

「う……（きもい……）」

ルッゲ

「久しぶりに全員で夕飯ね。さあ、食べましょう」

スパーク

「いただきます」

カイ・ノコ

「「いただきます！」」

スバル

「い、いただきます……」

スパーク

「そっいえばスバルは相変わらず探検隊をやっているのか？」

スバル

「う？うん……（なに？いきなり……）」

スパーク

「探検隊はきけんだろう！スバルは女の子なんだから、そんなことしてないで早く結婚しなさい！」

スバル

「は？なんであなたにそんなこと言われなきゃならないんですか？」

ルッグ

「スバル！お父さんと呼びなさい！」

スバル

「（お、お父さん？）……私は好きでやってるんだよ！お……お父さんにとにかく言われる筋合いはない！！」

カイ

「わ、わわ、ス……じゃなかった、お姉ちゃん……！！」

ノコタロウ

「それは言い過ぎじゃないのかい？」

スバル

「私は誰になんと言われても、探検隊をやるの……！」

スパーク

「お父さんの言葉が聞けないのかッ……！（バァン……！）」（ちゃぶ台返し）

ぐふうつ！？（ものかき下敷き）

ルツグ

「お父さん……！！やめてください！スバル、お父さんはスバルのことを思つて……」

スバル

「お父さんは私の気持ちを何もわかってないじゃない！！」

スパーク

「なんだと！？お父さんに向かってその態度はなんだ！！」

スバル

「うるさい！お父さんなんか嫌い！！」

スパーク

「ぐさあつ！！」

スバル

「うわあああつ！（なぜか号泣）」（部屋を出ようとする）

スパーク

「スバル！……わかっていないのは私だった！」

カイ・ノコ・ルツグ

「（えええええ！？いきなり展開が飛んだ！？）」

文字数の関係で。

スパーク

「スバルがそんな覚悟で探検隊をやっているのを……お父さんは知らないで……すまんな」

スバル

「……お父さん……わかってくれるの……?」

スパーク

「ああ……頑張ってこい、スバル!」

スバル

「うう……お父さん!（これが……家族なんだね!）」（抱きつき）

はい終ー了ー!!

スパーク

「なにいい!?もう少しスバルに抱きつかれていたi（スパアアン）」

ノコ・ルッグ

「セクハラ発言やめろ（てください）」

皆さん迫真の演技でしたね。

カイ

「僕とノコタロウさんはちょい役だったね」

ルッグ

「二度とやりませんよ、こんな役」(おたまを投げる)

スコーン!

ぐふうっ!?(おたまがクリーンヒット)

ノコタロウ

「でもこれでスバルちゃんは家族の温もりをわかってくれたよね?」

スバル

「はい!」

さて、そろそろお別れの時間でーす。(頭にたんこぶ)

スパーク

「はあ……ながかったな」

ルッグ

「楽しかったですよ」

ノコタロウ

「ものかきさん、作者同士これからも頑張りましょうね!(キラーン)」「(眼鏡が光る)」

はい。(同じくキラーン)

スパ・ノコ・ルッグ

『さよーならー！』

（時空ホールに消える）

さて、またまた今回もあの言葉で締め括りましょう！

ぴかっとひらめき、さらっとかいけつ！時空ホールうつつ……閉じよー！塩っ！

第五回 LET・S対談withフレンズ（後書き）

グダグダしません；

キャラ紹介4（前書き）

今回は第四章までのキャラです。どうぞ。

キャラ紹介4

個人名（種族名）：性別／一人称

サスケ（ワルビアル）： / 俺

探検隊“ヤンキーズ”（某野球チームではない）のリーダー。サングラスがトレードマークだが、種族柄サングラスを取っても印象は変わらない。口調がヤクザみたいで人相は最悪だが、フェアで礼儀正しい。シャナに憧れて探検隊になった。彼の鉄拳は食らうと痛い。

カガネ（ドクロッグ）： / 俺

探検隊“ヤンキーズ”（某野球チームではない）のメンバー。“ケツ”が口癖でサスケの腰巾着その一。人相は同じく最悪。なぜかシャナをよく思っていないようで、人前で堂々と悪口を言う。なかなかよくない性格。“シャインズ”とは陰悪ムード。

ギンジ（ズルズキン）： / おれっち

探検隊“ヤンキーズ”（某野球チームではない）のメンバー。“…っす”が口癖でサスケの腰巾着その二。人相は上に同じ。カガネと同じくシャナをよく思っていないので、カガネと一緒に悪口を言う始末。しかし、カガネより頭は回る様子。同じく“シャインズ”とは陰悪ムード。

フォン（フーデイン）： / 私

マスターランク救助隊“フォース”のリーダーおよびPRU（ポケモン救助隊連盟）のメンバー。冷静沈着、頭脳明晰で礼儀正しい性格。救助隊ならまず彼を指すと言われるほどの凄腕。

ラング（カメックス）： / 俺

マスターランク救助隊“フォース”のメンバーおよびPRU（ポケモン救助隊連盟）のメンバー。

ランティフと共に二人で“フォースの双壁”と呼ばれている。単刀直入でオブラートに包まないしゃべり方が特徴。それにより誤解を招くこともしばしば。

ランティフ（バンギラス）： / 我輩

マスターランク救助隊“フォース”のメンバーおよびPRU（ポケモン救助隊連盟）のメンバー。

ラングと共に二人で“フォースの双壁”と呼ばれている。ラングと違い回りくどいもの言いが特徴。話し方のせいでラゴンとはあまり馬が合わない。

キャラ紹介4（後書き）

ここまでが（一回目）キャラ投票で投票できるキャラです。みなさん、よろしく願いします！

第六回 LET・S対談withフレンズ（前書き）

この対談は第四章終了後に投稿されました。

ネタバレ……あ、技名とかすこーしだけ出てきます。内容にネタバレは一切ありません。

第六回 LET・S対談withフレンズ

どうも、ものかきです。

カイ

「カイです」

スバル

「スバルです」

懲りずにまたものかきの部屋にいます。

スバル

「もう慣れちゃったかも（ズズ……）」

カイ

「ここ意外にくつろげるんだよね。いすぎると本編に出られなくなりそうだよ（ズズ……）」

それは作者としては避けたいところ；

まあ、シャインズが本編に出られなくなるまえに……。

今回君たちを呼んだのは他でもない！

カイ・スバ・もの

『第六回 LET・S対談withフレンズを行うからだ!!』

……って!!うおい!?

なに声合わせてんの君たち!?

カイ

「いや、そりゃね」

スバル

「さすがに六回もやってれば嫌でもタイミングがわかってくるよね」

“嫌でも”は余計だいつ。

では早速対談相手を呼びましょうか！

ぴかっとひらめき、さらっとかいけつ！時空ホールうつつ……開け！ごまつ！

（ふすまに時空ホールが開き、そこからヒトカゲ、ゼニガメ、フシギダネが入ってくる）

ヒトカゲ

「うおっ、和室だ和室！」

ゼニガメ

「畳が禿げてる……？」

フシギダネ

「こらっ、そんなこと言わないで！！」

カイ

「禿げてるというか……」

スバル

「一部焦げてる」（なぜ焦げてるかは第五回対談をチェック！）

（無視）ではご紹介しましょう！将さんのご紹介により、ヒトカゲ君、ゼニガメ君、フシギダネちゃんにお越しいただきました！！

ヒトカゲ

「よろしくなっ！」

ゼニガメ

「同じくっ！」

フシギダネ

「よろしくお願いします！」

カイ

「……ん？」

どうしたんですか？カイ君。

カイ

「……入れ替わってない……？」

スバル

「そうだよね、本当ならヒトカゲ君はピカチュウ君と……ゼニガメ君はフシギダネちゃんと中身が入れ替わってるはずだけど……」

ゼニガメ

「あたりまえじゃん」

フシギダネ

「私たち……未来から来ましたもん」

カイ・スバ

「ふーん……。」

……って！！未来いいいいッ！？」

はい、シンクロリアクションご苦労様。

今回は将さんのご希望で、中身が戻ったあとの201X年から来ていただきました。

読んでない人のために軽く説明すると、彼らは立ち入り禁止区域にて転がってしまい、からだが入れ替わってしまっていたんです。

で、様々なトラブルに見回れる……んですが、今回はすべて元通りになった彼らと対談していただきます！

ヒトカゲ

「やっぱりさ、対談するからには自分の体でいたいよな」

ゼニガメ

「そりゃそうだ」

スバル

「……でも、ヒトカゲ君と入れ替わっていたピカチュウさんはなんで来てないの？」

ヒトカゲ

「ああ……あいつ勉強のしすぎで熱出しちまったんだよ。」

カイ

「えええ！？ものかきでは絶対にあり得ない！！」

やかましい！

ゼニガメ

「ピカチュウから伝言だ。『僕も対談したかったけど、風邪を移しちゃいけないから……三匹だけで楽しんでくださいね』……だって」

カイ・スバ

「何て健気な……！！」

フシギダネ

「というわけでね。私たちだけなんだ。……はいこれ、私が作ったクッキーです！三人分あるんで、よかつたらどうぞ」

カイ・スバ・もの

『うわーいw』

カイ

「クッキーだクッキー……！」

イエローミニマムデビル！煎餅用の皿持ってこい！！

スバル

「キャラをパシるな自分で行け」（怒）

カイ

「いったきまーす！」（もそもそ）

スバル

「あつ！私もー！！」（カリカリ）

ものかきも！（むしゃむしゃ）

カイ・スバ・もの

『んまあいー！！』

フシギダネ

「気に入ってもらえたようですねw」

ヒト・ゼニ

「俺たちの分はー？」

フシギダネ

「え、無いよ？」

ヒト・ゼニ

「「！？」」（精神ダメージ大）

さて、クッキーも美味しくいただいたところで、今回のテーマはズバリ……？

もしも、入れ替われたら？

……だ！

全員

『……はい？』

これはテーマというか質問なんですけどね。へっぽこキャラに、もし入れ替わるとしたら誰がいいか聞いてみよう！というわけです。

フシギダネ

「へえ〜」

ゼニガメ

「面白そう」

ヒトカゲ

「実際、誰がいいんだよ？二人は」

カイ

「ええ！？いきなりだなあ……」

スバル

「入れ替わったら、運動神経や能力は体の人の方に従われるんですよ？」

まあ、君がフシギダネちゃんと入れ替わったら、あのクッキーが作れるようになる……かも？

ゼニガメ

「へっぽこキャラじゃ誰がいいんだ？」

カイ・スバ

「うん……」

意外にしっかり考えてますね、二人とも。

カイ

「……シヤナさんとかいいかもね。あの強さを体験できる！」

スバル

「あ！わかるー！あの強さを使って（バトルで）暴れまわりたいかも！“ブラストバーン”使い放題っ！相手に啖呵切りまくり」

まあ、元の人格がネガティブだから、本来の強さが100%発揮されないと言え、発揮されないねえ。

スバルが入れ替わったら120%バシャーモとしての強さを発揮するかもしれん。

ヒトカゲ

「……終始気の強いお師匠さん……？」

ゼニガメ

「……ネガティブにならないお師匠さん……？」

フシギダネ

「相手に啖呵切りまくりのお師匠さん……？」

三匹

『……想像できない……』

カイ

「（ぼそっ）みんなシャナさんへの印象がなんだか……」

後はいます？入れ替わりたいキャラ。

フシギダネ

「逆に入れ替わりたくないキャラとかいたりして」

全員

『あー……』

カイ

「僕自身がへっぽこだから、“入れ替わりたくない”っていうのは無いかも。むしろ破壊的に体力の無い僕に、入れ替わりたくないって人がいるんじゃない……」

スバル

「うん。カイはやだ」

カイ

「ぐさあつ！？」

急所に当たった！！

さて、話も一段落したところで、こんなものを用意した！！

ガシャンッ！！

（どこからかバズーカ砲のようなものを取り出す。）

全員

『ひいひいッ!?!』

ヒトカゲ

「な、なんだこれ!?!」

カイ

「こ、こここ怖いよッ!?!」

フシギダネ

「いったいどこにそれを隠すスペースが!?!」

ゼニガメ

「ついに血迷ったか!?!」

スバル

「銃刀法違反だよッ!?!捕まえよう!?!」（ビリビリ）

全員

『おおー!?!』

ま、待て君たち!?!これは大きな誤解だよッ!?!ま、まってぎいや
ああ!?!

ゼニガメ

「ものかきの身柄確保しましたッ!?!」

フシギダネ

「負傷者（ものかきをのぞいて）0名ですっ！」

スバル

「危険物は！？」

ヒトカゲ

「ここにいますッ！たいちょー！！！」

スバル

「うむ！よろしい！！！」

カイ

「いや、あの、ちょっと……？」

スバル

「しかし、何でもものかきはいきなりこんなものを……？」（バズー
カの銃口を覗く）

カイ

「す、スバル危ない……！！！」

ヒトカゲ

「あ、ここになんかスイッチがあるぜ」

フシギダネ

「あ、本当だ……何か触んない方がいいような……？」

カイ

「ねえ……置いとこうよう……！！！」

ゼニガメ

「……ぼちっとな」

全員

『……………』。

?#\$%&am p;*¥——!?!?』

ズバァアン!!

(二つの空気の弾が……シャインズに命中!!!)

カイ

「うわあああ!?!」

スバル

「きゃあああッ!?!」

ばたり。

ヒトカゲ

「うわあああ!?!カイとスバルが倒れたあああッ!?!」

フシギダネ

「なにやってるのゼニガメ君ーッ!？」

ゼニガメ

「いやあ、何か触りたくなっちまって」

ヒト・フシ

「何がだッ!！」

(むくっ) 何の騒ぎですかあ？

フシギダネ

「あ、ものかきさん起きた!！」

ヒトカゲ

「おいっ!!あのバズーカ砲は何なんだよッ!？」

ゼニガメ

「スバルとカイが倒れちまったじゃねえか!！」

ヒト・フシ

「お前が言うな!！」

ああ……あれですか。カイとスバルが倒れたなら上出来です。さあて、どうなるかなあ？

フシギダネ

「な……何を言って……!？」

(むくつ)

ゼニガメ

「……スバルが起きた。」

スバル

「あゝ、びつくりした。なんだったんだろう？今は……」

フシギダネ

「スバルちゃん大丈夫!？」

スバル

「……ん？何言ってるの、僕はカイだよ？」

全員（ものかきを除く）

『……はあああ!？』

カイ(?)

「(むくつ)……うっ、なんなの？もう……」

ヒトカゲ

「か、かかカイだよなッ!？お前カイだよな!？」

カイ

「……スバルだけど？」

全員（ものかきを除く）

『なにいいいいッ!？入れ替わってるうつつ!？』

カイ（中身：スバル）

「……え!？ど、どうして私がカイにつ……!？」

スバル（中身：カイ）

「うわああ……尻尾が割れてる……！！」（尻尾をつかむ）

フシギダネ

「さっきのバズーカ……まさか……！？」

そう！

あれは将さん特製、“入れ替え銃”だっ！命中したポケモン同士のポケモンの中身を入れ替えるぞっ！

カイ（スバル）

「“ぞっ”じゃないっ！はやく元に戻しなさいよー！（ポカポカ）」

いやあ、カイの体でポカポカ打たれても大してダメージにはならないっていうね、プププ。

カイ（スバル）

「笑うなっ！カイツ！！10万ボルト準備ッ！！」

スバル（カイ）

「えええ！？出来るかなあ？」

ゼニガメ

「たぶん今の体はスバルだからできるはずだぞ？」

ヒトカゲ

「俺にもできたんだ。ほら、ほっぺに力を入れて……？」

スバル（カイ）

「え？こっ？」

ドシャアーンツ！！

いぎゃあああつ！？

フシギダネ

「うわっ！？出た！！」

カイ（スバル）

「やった！今だ、確保オツ！！」 カイの体で命令しています。

全員

『了解たいちよー！！』

フシギダネ

「あ！これリセットボタンじゃない？」

ヒトカゲ

「うお！やったな、押S」

ゼニガメ

「ぽちつとな」

全員

『うおおおい！？』

カイ

「も、もどったー!!一時はどうなるかと思ったよー!!」

スバル

「やっぱり、自分の体って……いいね」(しみじみ)

さて、そろそろお別れの時間です。 復活

ヒトカゲ

「えええ!?!」

ゼニガメ

「あつという間だったな」

フシギダネ

「じゃあ、二人ともさよなら!!」

カイ・スバ

「「さよならー!!」」

さて、今回もこの言葉で締め括りましょう!

ぴかっとひらめき、さらっとかいけつ!時空ホールうつつ……閉じよー!塩っ!

SS1 ツッパリとあんさん（前書き）

いきなり思いついたのでノリで投稿しちゃいました。
時々変な文になっているのはご勘弁w

SSはショートストーリーの略です。
では、どうぞw

SS1 ツツパリとあんさん

俺の名前はサスケ。

ダイヤモンドランクの探検隊・“ヤンキーズ”のリーダーだ。知ってる奴も知らねえ奴もとりあえずよろしく頼むぜえ。

今日はなんでか俺の身の上の話を無性にしなくなっちまった。やっぱり、俺も話し相手に飢えてんのかね？こんな人相なもんだから、あんまり自然体で喋ってくれる奴がいねえのよ、ははは。

ま、とりあえず勝手に語らせてもらうぜえ。あんま面白い話じゃねえから興味の無い奴は席を外してくれて構わねえぜ。まあ、よろしく頼む。

俺が探検隊になったのは今から6、7年前の話だ。その時俺はまだ進化前のワルビルだった。

今からする話は俺が探検隊を目指すきっかけとなったポケモンとの出会いの話だ。

あの頃の俺はとにかく突っ張ってたのよお。俺は世間から見ればなかなか裕福な家庭の出だったようだ。だが、俺の親^{こと}殊に親父の方は世間からの目に厳しい奴で、ことあるごとに俺に向かって“いい仕事につけ”だの、“いい加減遊んでいないで勉強しろ”だの、“つるむダチは選べ”だの……とにかく俺を縛り付けるのが得意だった。それしか脳がねえんじゃないのか、というほどに。

俺は親父の“忠告”が強まっていくのに比例してツツパリ具合も強

くなつていった。ケンカも激しかった。

『サスケ、またあの柄の悪い奴らと遊ぶのか。いい加減現実を見る。いつまでそうしているつもりだ？』

『あん？その減らず口を鏡で見てみたらどうだ？チャックが開けばなしになつてゐるぜえ。悪いがつるむダチは俺が決める。俺のダチだからな』

『サスケ！お前父親に向かつてなんという言いぐさだ！！』

『ごちゃごちゃうるせえよ！俺はお前を親父だと思つちやいねえ！親父面すんな！！』

『なにい！！ああ、そうか！わかったよ！なら勝手にしろ！……勘当だ！！』

『望むところだあん畜生！清々したぜ！じゃあな、二度と戻らねえ！！』

……と、まあ大体こんな感じで、俺は家に戻らずに気の合うダチと町をほつつき歩きながらかなりの悪さをした。あのあん畜生なジバコイルに捕まりそうになったこともしばしばだったぜ。

ほかの縄張りの奴らともかなりボコりあったりした。今思えば、俺の町はなかなか治安が良くなかったみてえだな。トレジャータウンに初めて来たときのあの平和を見て初めて知ったぜ。

俺がそんな生活を繰り返して数ヵ月たった頃、ダチのうちの二匹が妙な噂を持ち帰ってきやがった。

『おい、サスケ。この町に探検隊がうろついているらしいぞ』

『なに？探検隊だと？』

探検隊といったらロマンチストという名の気違いどもが群がる集団……というのが当時の俺の彼らに対する印象だった。それに探検隊といったらお尋ね者の逮捕も担っているから、無法者である俺たちにとっては敵なわけだな。

『何しに探検隊がこんなところへ来たんだよ？』

『どうやら、町の頭が俺たちを捕まえるように依頼したみてえだ』

『フン……気に食わねえ』

あんころの俺たちはとにかく気が荒かった。そいつに捕まるぐらいなら、その正義を気取った探検隊様をボッコボコにしちまおうと考えたわけさ。恥ずかしい話だがな。

そこで俺たちは早速探検隊の姿を探しに町をうろついた。するとだな、しばらくすると道端にキョロキョロ地図と周りの景色を見比べているバシャーモを発見したわけだぜえ。そう、それがあんさんだ。

縄張りに敏感だった俺たちは、町のポケモンと部外者の見分けはお安いご用だ。すぐにそいつが町に雇われた探検隊だって気づいたぜ。そのときのあんさんを見て俺は、“こんなチキンみたいに周りをキョロキョロしてる奴が探検隊？”と思った。あんなのは見かけ倒しだ。俺たちにかかれば瞬殺だと思ったわけよ。

そこで俺は、あんさんに近づいてこんなことを言った。

『こんな道のと真ん中でなにやってんだよあんさん？』

『……ん？……ああ。なんだ、あれだよ。ここら辺が町で悪さをするポケモンの縄張りだと聞いてな』

『ほう……？つまり俺たちのことか？“だましうち”！』

『！』

俺はあんさんに奇襲をかけた。あんさんは一瞬驚いた顔をしたが、コンマ一秒もかけずに戦闘体勢に入り“だましうち”を受け流す。なかなかやるな。

『いったいどういうことだ！？』

『ハッ！余所者がよくそんなことほざけるぜえ、探検隊さんよお！あんたどうせ町の依頼なんかで俺たちを止めに来たんだろぅが！』

『……なるほど、あんたらがその今回の“お尋ね者”ってわけか』

『……気づくのが遅えよ。』

こんなとき俺は、俺たちが“お尋ね者”扱いされた怒りよりその感情が先走った。あんさん鈍感だなあ、おい。

『なんだ？奇襲なんて姑息な手を使っじゃないか。あんたら全員よってたかって。……自分達の縄張りを侵されたくないのなら、正々

堂々自分だけの力で俺を追い払って見たらどうだ』

『んだと？言ってくれるじゃねえか！！』

……おい、お前ら！！こいつは俺一人でやる！！手エだすな！！』

俺の背後から激励と心配の声が上がったが、このときの俺は完全にあんさんの挑発に乗っていた。

……いや、どこかで俺はあんさんの言葉をその通りだとわかってたかも知れねえ。だが、心の隅で納得してても頭では理解できない、それがあのときの俺だった。

あんときの俺はとにかく突っ張りたいオトシゴロだったのよ、マジで。

そういうわけで俺はあんさんとサシで勝負した。こついうのもなんだが、こんとき俺はこの町で一番強かった。だからこの優男っぽいバシャーモに負ける気がなかった。

で、結果は……。

聞かなくてもわかるだろう？

……完敗だったぜえ。

なにもんだ、こいつ？

俺たちが文字通り“よってたかって”攻撃しても勝てなかったんじやねえの？

まあ、大分あとになってこのときのおんさんが“ハイパーランク”つつべらぼうに強いランクの探検隊だって知ったんだがな。……ランクの勉強しときゃあよかったぜ。

おんさんに瞬殺された俺は、しばらくその場で気を失っていた。気がついて周りを見渡してみると、俺と一緒にいたダチがいねえ。いるのは俺を倒したバシャーモだけだった。

『目が覚めたか。おんたの連れは、おんたが倒された瞬間に逃げていったぞ』

この言葉にはちよつとばかりショックを受けた。俺が信頼していた仲間は俺が倒された瞬間に逃げてしまった。俺を置いて。俺はそのショックを隠すために話題を逸らそうとした。

『なんで俺をジバコイルにつき出さねえ』

『改心の余地があると思ったからだ』

清々しいぐらいの即答だ。

『改心？俺が、か？』

『……あんたが非行に走った理由は、親がりのままの自分を受け入れてくれないからだろ？』

『…………』

『あんたは思った以上に義に厚い。思いやりがある。しばらく観察するだけでわかった。あんたは根が良いってな』

『観察？』

『あんたらには悪いが、俺はあんたらを数日間尾行していた。その様子ならバレていなかったみたいだな』

尾行だと？気づかなかった。一生の不覚だぜえ。

『…………なあ、俺はあんたが探検隊に向いていると思うがな』

『ああ！？』

冗談やめてくれよあんさん。嘘だろ？

『バトルを見ているもあんたは筋がいいし、将来化けるぞ』

化ける？…………何にだよ？

『あんただってずっとこのままじゃいけないと思ってるだろう？今がチャンスだ。自分が変わる、な』

『…………』

『まあ、よく考えることだ。いっておくが、同じ探検隊の“仲間”

は、絶対にお互いを裏切らない』

あんさんは格好よくそう言い残して立ち上がった。

不覚にも俺は、あんさんのその姿が胸に響いたって訳よ。

決して強がっていない、気取っていない、だが自分の仕事に誇りを持っている者だけが出せる独特のオーラがあんさんから滲み出ていた。

ああ、俺もこんな風になりてえ。と思った。

俺は、あんさんが去った数日後に覚悟を決めた。数カ月ぶりに家に戻って、親に置き手紙という名の殴り書きを残してまた家を飛び出した。

“一流の探検家になるまで家に戻らねえ”

ってな。

その後俺はビクティニのギルドで探検隊になった。二人の仲間ができた。かわいい弟分だ。そしていつのまにかチーム“ヤンキーズ”はダイヤモンドランクになっていた。

まあ、いまのあんさんは俺のことなんざさっぱり忘れちゃっていたみてえだな。

……これが、俺が探検隊になるきっかけだぜえ。

あんま面白くなかったろ。ここまで聞いてくれてありがとうな。

さて、俺はもう戻るぜえ。今した話はあんま言いふらすなよ。

……あ？

録音しただと？

てめえふざけてんのか、なにしてやがる。んなら投稿料寄越しやがれ。

あん？みんな聞きたがつてる？マジなのか？んなら別にいいんだがなあ。

……阿呆、照れてねえよ。

ん、じゃあこれからもよろしく頼むぜえ。

あばよ。

第一回　へっばこ人気キャラ投票結果発表（前書き）

投票の理由を書くに当たって、一部投票してくださった皆さんのメッセージを引用させていただいております。

では、どうぞ。

第一回 へっばこ人気キャラ投票結果発表

紳士淑女、各種族のポケモン諸君!!

へっばこ作者ものかきでございます。

みなさん、お待たせしました!へっばこ連載4ヶ月である記念すべきこの日に……。

へっばこキャラ人気投票の結果発表を行いたいと思います!!

全員

『わ〜!!!(ぱふぱふ!どんどんどん!!!)』

さて、今回読者様の清き票によりランクインできたへっばこキャラは 11匹!

総票数はなんと、55票!!

まさかこんなに票が集まるとは…… 感謝感激です!

では、さっそく結果発表に参りましょう!

LET'S 開票!

まずは9位の発表です。同着で三匹ランクインしました。

票数は一票！まず一匹目は……？

レイです！

レイ

「えッ！？私！？やった！！」

はい。ものかきもまさかでした。ほぼ一回しか出てきていないのに一票入りましたよ！

理由は

『手持ちに入れていた思い入れのあるポケモンだから』

です。

レイ

「え……それってつまり……？」

はい。どちらかと言うと種族のおかげで票をいただいたという……。

レイ

「……うん……次はキャラで票をもらって見せるわ！！ありがとう

「！」

同着で9位、二匹目です。そのキャラは……？

サスケです！！

サスケ

「ん……？おお、マジか。ありがとうよお」

理由は

『これぞ！って感じで男らしいから』

だそうです。

サスケ

「はは、ちよつと買い被りすぎなんじゃねえのかい。これが俺の自然体なんだが」

照れてますね。

サスケ

「照れてねえよ。……まあ票を入れてくれた奴、ありがとうよ」

さて、9位も最後の一匹になりました！ラッキーなキャラは……？

ミーナです！

ミーナ

「やりましたね！ありがとうございます！」

理由のほうはというと……？

『スカイフォームが強すぎるから』

です。

ミーナ

「まあ、ボクは強いからね」 スカイフォーム

まあ今後もスカイのミーナは活躍するでしょうね。こっご期待です！

では、第8位の発表です。票数は二票！そのキャラは……？

“もう一人のカイ”です！

『カイ』

「……ん？」

いまだに声しか登場していないのにランクインしていました。
理由は

『強いから』

『謎めいてる感じだから』

『喋り方がかつこいいから』

『周りを守ろうとする姿にが優しいと思ったから』

です！

『カイ』

「その理由に恥じぬように頑張っていこうと思う」

でも、謎めいていて好きだということは正体が明かされたら……？

『カイ』

「……“波導弾”」

ぎゃあああ！？

さてどんどん参りましょう！同着で二匹いたので次は6位です！！
票数は3票！
まず一匹目は……？

リオナです！

リオナ

「……え？本当に？」

はい。理由は……

『可愛らしいお姉さんのような少し大人びた女性っぽい性格が素敵だから』

『あのセリフがクールでかつこいいから』

『個人的にキュウコンが好き好きだから』

『リオナさんにもっと出番を！』

最後には驚きましたね。
比較例の台詞がなかなか人気だったようです。

リオナ

「あんまり気に入られるような台詞じゃないような……。でも、ありがとうございます」

さて、リオナと彼の今後も見所のようです。

そして同着6位！そのキャラは……？

ラゴンです！！

ラゴン

「ほう！なかなか嬉しいじゃないか！！」

6位は二匹ともギルドメンバーですね。
理由は

『手持ちに使っていた、思い入れのあるキャラだから』

『サザンドラという種族が好きだから』

『普段は厳格なのにグミであっけなく買収されるところが面白いから』

ラゴン

「……喜んで……いいのか？これ……」

さて、これより先は同着がいなく、すべて一匹ずつ！
5位の発表です！！票数は4票！そのキャラは……？

ルテアです！

ルテア

「うおおおお！俺来たぜえ！！」

では理由を。

『仲間を大切に思う精神と救助隊としての行動は見ていて頼りになりそうな印象を受けるから』

『二つ名の“ 槍雷のルテア ” がカッコいいから』

『豪快なところが頼もしそうだから』

『シヤナいじりという良い趣味を持っているところが面白いから』

『大活躍してるから』

ルテア

「おう！みんな俺のこと良くわかってるじゃねえか！！特に趣味とか、趣味とか、趣味とか！ありがとな！！」

『なんとなく』

ルテア

「…………あ？」

いや、票をくれた人のなかに…………。

ルテア

「…………さ、サンキュー…………」

お次は第4位！5票獲得のこのキャラ！

シャナです！

シャナ

「…………えっ？…………まさか」
いや、まさかってなんですか。

シャナ

「…………票が入ると思っていなかった」

…………。

理由はですね。

『謙虚な所とバトルの派手さがいいから』

『バシャーモの見た目とは思えないネガティブのところが良いから』

『過去が気になるから』

『これからも期待してるから』

『強いし、かつこいいから』

『ネガティブなところが自分に似ている部分があるから』

『バシャーモという種族が好きだから』

シャナ

「…………嬉しいが…………理由が一部な…………」

素直に喜びなさいよ。

さて、へっばこキャラも残すことあと三匹！ベストスリーの発表です！！

第3位！！

票数は6票！この方です！！

ウイント＝インビクタです！！

ウイント

「うわーい！やったあ！（Vサイン）」

親方様がベストスリー！！では理由を見ていきましょう。

『自分のキャラと似ている部分がある』

『ギャップがあるから』

『グミを押し込んだりおちゃらけているように見えるけど、先祖の名に恥じぬようやる時は必ずやってくれるから』

『テンションが楽しそうだから』

『グミがほしいから』

ウイント

「グミい？グミならあげるよお？はい！！」(グミを放り投げる)

まさか親方様がこんなに人気だとは思ってなかったものかきです。
よかったね！

ウイント

「これからも頑張っていくよお！インビクタ家の名にかけて！！」

続いて2位の発表です！！

票数はなんと、今までを大きく上回りその数 12票！
圧倒的支持を得たキャラはこのポケモン！

カイです！

カイ

「え……主人公なのに2位？」

はい。やっぱり君はどこでもへっぽこですね。1位じゃないですよ。では理由です。

『タイトル通り、へっぽこな主人公だけど、性格は心優しく、いざと言う時には、無理な状況でも敵から庇ったりと、心はへっぽことは真反対だと思うから』

『主人公ながらへたれが入ってところが珍しくて見ていて楽しいから』

『これからも期待してるから』

『いつも、やれることをやろうとする姿がかっこいいから』

『へっぽこぶりが好きだから』

『リアルという種族が好きだから』

です。

面白いことに、投票をしてくれた読者様のなかでも、へっぽこだから投票した人とへっぽこだから投票しなかった人で分かれました！フツ、残念だなカイ君。ま、頑張りたまへ。

カイ

「……ご期待には添えないかと……」

さあ、キャラ投票も残すこと一位のようになりました！
2位以下を引き離し、ダントツの16票を得た栄光の第1位は……
！？

スバルです！！

スバル

「ええッ！？ほんと！？みんなありがとー！！」

まさかのへっぽこヒロインが主人公より人気を得ていました！！
では理由を見ていきましょう！

『ピカチュウという種族が好きだから』

『強気なときと優しいときのギャップが可愛くて好きだから』

『自分の小説のキャラと似た者同士で話も合いそうだから』

『元気がありすぎるところがキュートでかわいいから』

『オーバーなくらい喜ぶ時があれば、怒りを露わに突貫すること』

あり、表情が豊かだから』

『強気な態度でヤンキーズに挑んだから』

『電撃の扱いに長けていて戦いの中で成長していくというスタイルがいいから』

『可愛いし、頭も良さそうだから』

『たまに見せる腹黒い場面が面白いから』

『主人公や師匠よりちょいちょい目立っていてかっこいいから』

スバル

「そお？あんまり意識してなかったんだけどねっ」

それがスバルの恐ろしさなんだよね。

スバル

「何か言った？」

いえ、何も？

スバル

「みんなありがとう！これからもみんなの期待に応えていくからねっ」

改めて、まだ連載をはじめて間もないへっばこのキャラに投票をしてくれたみなさん、本当にありがとうございます！

ランクインしたキャラたち『ありがとうございます！』

そして、今回ランクインできなかったキャラのみなさん、次回の投票まで頑張ってくださいね。

まあ、それは作者次第ですね。これからも精進していきます！！

では、これで第一回へっばこ人気キャラ投票を締めたいと思います！

みなさん、さよーならー！

～告知～

今回人気投票にて『リオナさんに出番を！』という要望があったので、近いうちにショートストーリーを書きたいと思います。いずれ投稿するので期待せずにおまちください！

では、この辺で！

結果

1位	スバル
2位	カイ
3位	ウイント「インビクタ
4位	シャナ
5位	ルテア
6位	リオナ
ラゴン	
8位	“もう一人のカイ”
9位	レイ
サスケ	
ミーナ	

第一回　へっばこ人気キャラ投票結果発表（後書き）

投票してくださったみなさん、読んでくださった全ての皆さん、
ありがとうございます！

また次回の投票をお楽しみにw

SS2 夏と言えば……。 (前書き)

え……。!?

パソコンでユーザ登録してもケータイで執筆できたのをおおお!?

……ということで、試験的に昔もらったバトンを番外編にのせてみました!

SS2 夏と言えば……。

1、夏と言えば…… キャンプ!!

スバル

「やっぱりキャンプは山の川沿いだよねえ。 と言うことで、登るよっ！カイ！」

カイ

「えええええええ！？まってええ！？僕！？この僕が登るのおおお！？（カイは主人公にしてド貧弱）」

スバル

「問答無用 キャンプは一人でするものじゃないんだから（カイを引きずる）」

カイ

「いやああああ！！（ズルズルズル……）」

数分後。

カイ

「……………し、死ぬ……………ぜえ……………！！」

スバル

「ねー、カイもつと早く歩いてよー！。 まだ歩いて数分なんだけ

ど
」

カイ

「うつ……（がくつ）」

スバル

「え……（ぶつ倒れた……？）

き、救急車あああ！！（存在しない」

（カイをキャンプに連れて行くのは無理だと悟った夏の日のスバル）

2、夏と言えば、怪談！！

ルテア

「なあ、シャナ」

シャナ

「なんだ？」

ルテア

「こんな暑い日はさあ……やりたくならねえか？」

シャナ

「（ぎくつ）な、なにが？」

ルテア

「（自身の電気技で自分の顔をしたから照らす）怪談だよおおお
く……怖い話だよおおお……」

シャナ

「いいいいいい！？や、やめろその目でこっちを睨むなっ！すでに
顔が怖い、顔がっ！」

ルテア

「さて、じゃあ俺からだな。むかーしむかーし、あるところに一組
のカップルがおりましたとさ」

シャナ

「むかーしって……おいおい」

ルテア

「二人はそれなりに仲むつまじいカップルだった。ある日ガールフ
レンドが、夜中人気の無いところに彼氏を呼び出しました」

シャナ

「……（どきどき）」

ルテア

「呼び出された彼氏は、ガールフレンドの後姿を見つけると声をか
けます。『どうしたんだ？こないきなり』」

シャナ

「……」

ルテア

「すると、彼女は不気味すぎるほどゆっくりとこちらを向きこつ言

った……」

シャナ

「……（ゴクリ）」

ルテア

「……。」

『私ネガティブなチキンとは付き合えないわ—————っ！
！……！』」

シャナ

「いいやあああああああ……！その話やめろおおおおお
おお……！」

（夏とえば、怪談と失恋 b y ルテア）

SS2 夏と言えは……。 (後書き)

ちゃんと投稿されてますかねえ。

SS3 ただいまの裏側

あの人が帰ってきたと知らされたのは、いつもと変わらず淡々と業務をこなしていたあの日だった。

「ひとまず、これが今日のノルマです。お願いしますね、ラゴンさん」

「ひーっ、まで、これを全部俺にやらせるのか？」

冗談なしにドスの効いたあの低音ヴォイスが二オクターブほど跳ね上がった。それも無理のないことね。だって、積み上がった書類のせいで親方の机が今にも壊れそうなもの。

もともとラゴンさんは生粋の探検家気質で、デスクワークは大の苦手。……判子を押すだけの作業をデスクワークと呼んでもいいのならね。

「リオナーっ！！パーセントでもいいから手伝ってくれー！！」

「私だって忙しいんです。あなたがギルド中を回って、弟子たちに無駄遣いをやめろだの、ギルドの経理だの、今後の予算案の提出だのを全て請け負ってくれるのなら、喜んで書類の判子押しを手伝いますか？」

「……い、いや、いい。すまん、お前も忙しいのをすっかり忘れ

ていた」

恨むのならウィント親方を恨まなきゃね。

私　リオナがこのギルドで“裏親方の右腕”と呼ばれて早数年。あいかわらず私情を押し込めつつの業務遂行だ。いちいち私情なんてものを介入させていては、一日に片付けなければならぬ仕事は永遠に終わらない。それほど鬼業務なのよ、私がいるポジションは。

……でも、私がここ数年間で周りから冷たい印象を受けることが強くなったのは確かね。『リオナ』仕事人』という方程式はすでにギルドの外まで伝わっている。

“顔はいいが、近寄りがたい”という私の噂があるのはレイから聞いた。

たしかに、あの人が去ってから私に近づいてくるポケモンは何匹かいたし……実際に私自身、寄り添ったりもした。でも、あの時から私が独りになったあの日から、私の心にぽっかりと空いた穴は……他のひとでは絶対に埋められなかった。離れてみて、埋められないと初めて知った。

今の私には、仕事をしながらとにかく集中しているときにしか心に空いた穴を忘れられなかった……。

「……オナ……！リオナ！！」

「……はっ！！な、何？レイ、どうしたの？」

しまった。いつの間にかウトウトしてたわ。私としたことが……。私が眠気を吹き飛ばすために首を振ると、私の前にレイがものすごい目付きで立っていた。

「リオナ！！帰ってきたわよ！帰ってきたのッ！！」

「帰ってきた？誰が？」

「誰って……決まってるじゃない！

シャナよ！！シャ・ナツ！！」

「……」

……。
……。

「……は？」

なんですって？

「しかも！かわいい弟子を二匹引き連れて！」

「弟子……！？」

明日は雪が降るわ。断言していい。ラゴンさんならここで『槍が降る』といって爆笑するでしょうけど。

「リオナッ！！今から会いに行きましょうよ！！」

「え？」

レイが私の前足を引っ張ろうとするけど……。

「い、いいわよ私は……！まだ仕事が残ってるし、それを片付けないと……」

「ねえ、いつまでそんなこといつてんの！！このチャンスを逃したら、もう二度と元の関係にに戻れないかもしれないのよ」

「……やめて。……自分で会いに行くわ。覚悟が決まったらね」

私はレイに微笑んで見せた。あんまりいい笑顔とは言えなかったけど、レイを諦めさせるには十分なものだった。レイはゆっくりと私の前足を離れた。

「そう……ごめんね。いきなり強引なことをして」

「うっん。ありがとう」

『自分で会いに行く』

……と言って気丈に振る舞ったものの、いざ残った仕事を片付けようとすると……集中できずに手がつかない。

帰ってきた？

まさか、あの人が？

……弟子を引き連れて？

“二度と戻らない”と宣言しておいて、今さらなんの風の吹き回しかしら。

「はあ……」

駄目だ……！

一度考え始めたら集中できないわ。

私が手を止めると、ある考えがふと頭をよぎった。

ねえ、素直に喜んだらどうなの？嬉しいんでしょ、帰ってきてくれて。

いいえ。成り行きとはいえ私は一度彼を振ったのよ。今さらあつちは会いたいとは思ってないわ。

会いたいんでしょ？結局はあの人のことを忘れられないくせに。

まさか！！五年よ、五年！別の誰かを好きになってるわよ！！私な
んか……。

「……なに考えてんのよ私は……。らしくないわね。これじゃ片付
くものも片付かないじゃない」

しょうがないわね。不本意だけど、会いに行つてやるわよ！！
私はその場に立ち上がった。

……と、その前に。気分転換を兼ねて三階に行こうかしら。
そのあとで覚悟を決めてやるわ。

ギルド三階の展望台から見えるトレジャータウンは、夜の闇に明か
りが煌めいていてとても幻想的な美しさだった。

ギルドの弟子しか見られない特別な景色。

そして、私個人からしても特別な景色だった。

そう、五年前にここで私は。

「何？話つて。……私をここに呼ばなきゃいけないような話なの？」

私はギルド展望台の夜景から目を離して後ろを振り返った。

なぜ私をここに呼んだのか。もちろんそれは誰にでもわかる理由だけど、私はあえてあちらが切り出すのを待った。

振り返った先には、緊張したせいか表情がいつもより険しいあの人の姿がある。

「いや、あの。たいした話ではないんだ。ただ」

いきなり言葉が途切れる。緊張しすぎなのよこの人は。はあ……情けないわね。

「『ただ』？」

私はかわいそうだから助け船を出してあげた。すると彼は、スイッチの入った人形みたいに再びぎこちなく声をあげる。

「ただ、俺はお前に言っておきたいことがあって」

またスイッチが切れる。まるで電池が残り少ない人形みたいね。

じれったいわ。

「……早く言つて。待っててあげるから」

「ぐっ」

あら、プライドを傷つけちゃったかしら。だって、早く言わない方

が悪いんだもの。最悪二文字で終わる言葉なのに。

「……俺は」

「なに？」

「……」

「……」

「……」

「……………」

（五分後）

「……遅いッ！！」

なんなのよ、このヘタレッ！！なんで次の言葉に五分も費やすのッ！？

待つてあげた私がバカだったわ。

「……私、帰るわよ」

「ちょ、ちよつと待てリオナ！もう一回だけチャンスをくれっ！！」

「なあああにがチャンスよッッ！！今度は何分費やすのかしらッ！？」

こいつはチキンよ！！期待した私がバカだったわ。
私はあの人の脇を通りすぎて二回へと続く階段を降りようとした。
すると。

「ま、待て待て待て！」

誰が待ちますか！

「好きだ」

「……は？」

今、なんて？

「……いや、『は？』って……」

「……もう一回言ってくれない？聞き逃しちゃった」

「……人が勇気を出して言ったのに」

「あなたが悪いんじゃない！間を置かずに言うから！」

「ま、まあそれはそうなんだが……」

思い出すだけでムカついてきたわ……ッ！！

あのチキンに会ったら、ひとまずは顔を殴っておこうかしら。

何が“他のひとでは絶対に埋められない穴”よ！何考えてるの私は！バカみたいじゃない！

いいわ。覚悟は決まった。

あなたをフツたこのリオナが、直々に会ってやろっじゃないの！

……いえ。たぶんあの人のことだから、自分からここに来るに決まってるわ。

だから、その時にこう言ってやるの。

……『お帰り』って。

あの人が帰って来たと知らされた瞬間、私の心に空いた穴はいつの間にかゆっくりと塞がれていった。

そう、それはまるで、傷が癒えるかのように。

……ああ……やっぱり私って、あの人に未練があるのかしら。

SS3 ただいまの裏側（後書き）

リオナ短編です。

リオナの一人称がこんなに難しいとは……！
グダグダすいませんorz

第七回 LET'S対談Withフレンズ（前書き）

久々の対談、どうぞ！

第七回 LET'S対談withフレンズ

どうも、ものかきでございます。

カイ

「……」

あの、カイさんどうしてこたつテーブルの上に突っ伏しているのですか？

スバル

「本編と憩いの部屋との行き来は意外に体力を使っただよ。ものかきにはわからないだろうけどね（ズズ……）」

もう、しっかりしてくださいよ！いまから例のアレやるんですから！

カイ

「……徒労……」

……；

（これ以上はキャラ崩壊必至……！）

さ、さてっ！

今日君たちを呼んだのは他でもない！

第七回 LET'S対談 withフレンズを行うからだッ！！

カイ

「うへえッ！？本当！？（復活）」

スバル

「久々の対談だねっ！！（わくわく）」

はい。ものかき自身も何回目の対談か忘れておりました。

では早速お呼びしましょう！

ぴかっとひらめき、さらっとかいけっ！！時空ホールうつつ……
開け、ごまっ！！

（時空ホールが開いて、バンダナが目立つアチャモと、ピジョンが
出てくる）

アチャモ

「……来ちゃった」

ピジョン

「……」

カイ

「ねえ、どうして後者はふてくされた顔なの？（小声）」

スバル

「さあね」

さて、さらにさらに！？

時空ホールうつつ……二度開き、ごまっ！！

カイ・スバ

「んっ!？」

(再度時空ホールが開き、ヘルメット装着ポツチャマが入ってくる)

ポツチャマ

「よお、来てやったぜカイ、スバル！」

カイ・スバ

「スバル!」

さて、順を追って紹介しましょう!

タチカナさんこと橘紀さんのご紹介で、まず救助隊の方からアチャモのリユウ君とピジョンのサジエッタさんです!

リユウ

「り、リユウです。よろしく……(顔が青い……犬!?)」

サジエッタ

「……チッ」

(え……舌打ち?なんで?なんでええ?)

サジエッタ

「……サジエッタだ。お見知り置きを」

続いて、探検隊の方からポツチャマのスバル君にお越しいただきました!

スバル

「へっ!この方のスバルと名前が一緒のスバルです。よろしくな」

さて今回は、救助隊・探検隊・へっばこのトリプルコラボでございます！

サジエッタを除く全員

『おおー！』

ヘルメットスバル

「なんか名前だけ聞いたらすごい響きだな、トリプルコラボって」

あ、ちなみにスバルは名前が重なるので橘さんの方のスバルは“ヘルメットスバル”、へっばこの方のスバルは“へっばコスバル”と呼びます。

へっばコスバル

「えええー！？なんかやだなあ、私がへっばこみたいじゃない？」

だまらっしやい。

そして、サジエ公はリュウ君の保護者役ということで。

サジエッタ

「誰がサジエ公だ、誰が！！タチカナの呼び方を真似するな。……なぜ俺がこいつの保護者役なんか……」

リュウ

「指名されたんだから仕方がないじゃないか。よろしく、サジエkgぎゃっ！？」

サジエッタ

「……今何か言おうとしたのを聞くと、すこーしばかりおいたが過ぎるようだな。俺が丁重に埋めてやるのか？」

カイ

「ひいつ!？」

ヘルメットスバル

「もう埋まつてるぜ。っていうか、カイが怯えてるぞ。」

へっぽこスバル

「……カイ、落ち着いて」

さて、集まったキャラの60%が記憶喪失と異例な今回の対談。そのテーマはズバリ……！

ヘルメットスバル

「60%?……ああ、オレとリュウとへっぽこスバルか」

ちょ、ちよつと?ものかき司会途中ですよ；

ごほん。ズバリ……！

“宝物”について、だ！

全員

『……はい?』

今回のゲストであるリュウ君は赤いバンダナを、ヘルメットスバル君は文字通りヘルメットをそれぞれ宝物のように大切に持っていま

すね？

リュウ

「持っているというか……装備？」

ヘルメットスバル

「記憶ねえけど、なんか大切なもののような気がするんだよね」

そう！なので今回は“宝物”についてとことん語り合おうではないか！！

カイ

「えらくテーマが抽象的じゃない？」

スバル

「誰が考えたの？このテーマ」

スバ・リュウ・サジエ

『……タチカナ』

さて、まずは宝物の定義を載せておきましょうか。

宝物【名】　　宝となる品物。また、その人（ポケモン）にとってかけがえのないもの。

ヘルメットスバル

「またえらく抽象的だな、おい」

リュウ

「カイとへっぽこスバルの宝物は何？」

カイ

「うーん、形のあるものじゃないんだけどなあ」

サジエッタ

「形のあるものだけが宝物とは限らない」

確かに、それはそうですね。

カイ

「僕の宝物は……“仲間”かな」

全員

『おー』

へっぽこにはいいこと言いますね。

ヘルメットスバル

「確かに、オレもキロットは大切な。それはもう泣き虫で、手を焼いたりしてるが」

サジエッタ

「俺もキトラは同じ境遇だし、大切という面では宝物に近い」

リュウ

「……オレは？」

サジエッタ

「……（――）」

リュウ

「え………どういうこと？それ、どういう意味？ねえ、サジエッタさん！？サジエッ」

バリッツ！

へっぽこスバル

「あ………」

ヘルメットスバル

「………また埋められた………」

え、ちよつと、ものかきの部屋のふすまが……。

サジエッタ

「（無視）それで？へっぽこスバルはどうなんだ？」

スバル

「私？私は………“平穏な時間”………かな」

全員

『平穏な時間??』

今日は抽象的デーですかね。

カイ

「どういうこと？」

へっぽこスバル

「ほら、私って記憶喪失だから、昔自分が何やってたかわからない訳じゃない？」

リュウ

「まあ……」

ヘルメットスバル

「そりゃな」

へっぽこスバル

「いつか私の記憶が原因で、今この平穏が壊されるかもしれないし、私たちが住む世界も不安定になりつつあるし。だから、みんなと笑い合っていてくれるこの平穏な時間を大切にしたいなって」

ヘルメットスバル

「はあ、なるほどな。確かに、オレたちの世界も“時の歯車”がどーたらこーたらって言うてたしな……」

リュウ

「オレらは異常な自然災害が多発してる。へっぽこスバルの言う通り、平穏でいられるのも今のうちかもね」

サジエッタ

「確かに“平穏な時間”は“宝物”だな」

リュウ

「そういうサジエッタはどつなのさ?」

サジエッタ

「俺の“宝物”は……」

宝物は?

サジエッタ

「……ここで俺がいう義理もない」

ズルッ。(全員ずっこけ)

ヘルメットスバル

「ここまで焦らしておいて言わねえのか!」

カイ

「ははは……」

みなさん、しんみりするのは非常によろしいと思いますけどそろそろ丑の刻なんで、次のコーナー行っちゃっていいですか?

カイ

「う、丑の刻?」

ヘルメットスバル

「次のコーナーってなんだ？」

ふふ……。今回の対談テーマ“宝物”とかけてまして……？

LET・S お宝アイテムお披露目〜！

全員

『はい？』

今回の対談キャラのお宝ともいえるアイテムを極秘ルートで入手！
それらを今回ここでお披露目します！！

リュウ

「ご、極秘ルート？」

サジエッタ

「そんなアイテムなんかどこにあるんだ？」

はい。ではここにアイテムを持ってきてもらいましょう。

ジョニーくーーーーん！！

全員

『じよ、ジョニー？』

がしょん、がしょん、がしょん……。

カイ

「うわぁ……なんか足音がするよぉ……！」

サジエッタ

「キトラなら悲鳴ものだな」

（ものかきの部屋のふすまから茶色い美術用人形が色々なアイテムをもって現れる）

カイ

「ふ、ふすまからッ!？」

ジョニー

「……」

おおー！ご苦労様です、ジョニー君！

ジョニー

「……（躍り狂う）」

ヘルメットスバル

「うおわっ!？踊り始めやがったぞこいつ!？タチカナの言った通りだ」

へっぽこスバル

「この子だれー!？」

ん？

ジョニー君はですね、橘さんがお世話になっているという美術用マ

ネキンさんです。丑の刻（午前二時）になると、ひとりでに躍り狂います。（現在丑の刻）

カイ・へっぽこスバル

「こわっ！！」

リュウ

「なんで連れてきたんだよー！？」

いやあ、君たちの方の“お宝”をタチカナスタジオからジョニー君に持ってきてもらってたんですよ。

サジエッタ

「なんだこれ……ハリセン？」

ヘルメットスバル

「ああああ！？それオレのハリセン……！」

はい。

お宝アイテムその一、ヘルメットスバル君が感想欄などで使うハリセンです！

へっぽこスバル

「そういえば、ハリセンの使い方は私が教えたんだよね」

ヘルメットスバル

「おう、その節はお世話になったな。今じゃハリセンはタチカナ制裁手段になってるぜ！」

……作者側の立場では、へっぽこスバルが余計なことを教えたせい

で橘さんに迷惑が……！」

へっぽこスバル

「悪い？（ニコツ）」

い、いえ……（迷惑くスバルの圧力）

カイ

「ねえ、このジョニー君の背中にくっついてる紙は何？」

ヘルメットスバル

「えーっと、なにになに？」

『野暮用があるから今日は二人で依頼をこなしてくれ』？」

リュウ

「ん……？それどこかで見たことがあるような……」

サジエッタ

「おい、それ……まさか……！」

はい！

いつぞやの『イジワルズ』がEブレイブを嵌めるためにサジエッタさんの名を騙って書いた伝言でございます！

サジエッタ

「……（ピキッ）」

カイ

「確かにお宝アイテム……」

いやあ、入手するのに苦労しましたよ！

ヘルメットスバル

「ははあ、キトラとリュウの二人はこれに騙されたって訳だな」

リュウ

「いやあ……筆跡ですっかり騙されちゃって……」

へっぽこスバル

「野暮用とか書いてるけど、本当は……」

カイ

「“催眠術”でお縄についてた」

ジヨニー

「……」

サジエッタ

「……（プチン）」

ものかきのなかでは特に面白かったんですよ、イジワルズ編が。だからぐはあっ！？

ドゴンッ！！

ぶへぼッ！？（地面に埋められる）

サジエッタ

「……そんなに埋めてもらいたかったのか、お望み通り丁重に埋葬してやったぞ」

カイ

「ヒイツ!？」

ヘルメットスバル

「今度は踵落としかよ」

リュウ

「ものかきさーん、だいじょーぶー？」

へっぽこスバル

「いつものことだけどね」

さて、そろそろお別れの時間でーす。

ヘルメットスバル

「まだお宝アイテム残ってるのに？」

いや、ちょっと尺の関係で……。

リュウ

「気絶してた時間長かったもんね、ものかきさん」

サジエッタ

「……」

ヘルメットスバル

「さて、じゃあ帰るか！」

カイ

「頑張ってね！」

へっばこスバル

「さよなら！」

（ヘルメットスバルが時空ホールに消える）

サジエッタ

「俺たちもいくぞ！キトラが待ってる」

リュウ

「じゃあね！」

カイ・スバ

「「さよーならー！」」

では、今回もあの言葉で締め括りましょう！

ぴかっとひらめき、さらっとかいけつ！時空ホールうつつ……閉じよー塩っ！

第七回 LET'S対談withフレンズ（後書き）

今回の対談をもっと楽しく読みたいという人は、橘紀さんの

ポケモン救助隊 エルドラグ^{II}ブレイブ³緋龍の勇者⁴
ポケモン探検隊 スピリッツ⁵光り輝く命⁶の人物紹介欄。

そして……

ポケモン不思議のダンジョン番外編⁷タチカナスタジオ⁸

を読んでいただくとさらにわかりやすく読めます！

第八回 LET・S対談withフレンズ

どうも！ものかきです！

スバル

「ものかきは挨拶がワンパターンだね」

カイ

「そろそろ読者さんが飽きちゃうよ？」

こ、このコーナーが始まったの第一声がそれ！？
じゃ、じゃあどうすればいいんですか……。

スバル

「オッス！オラものかk」

却下ッ！！

カイ

「見た目は眼鏡、頭脳は五歳児！その名h」

やめえええいッ！！

待てッ！頭脳が五歳児ってどういうことだ！？

だめだ！やっぱりいつものままが一番いい！！

カイ

「ちえっ」

スバル

「つまんないの」

なんなんだ君たちは……。ごほん！！気を取り直して……。

今日君たちを呼んだのは他でもない！ズバリ……。

第八回 LET・S対談withフレンズを行うからだ！

カイ

「うん」

スバル

「やっぱりね」

……。

では、さっそくお呼びしましょう。

ぴかっとひらめき、さらっとかいけつ！時空ホールうつつ……開
け、ごまっ！！

（時空ホールが開く）

カイ

「ホールの大きさがいつもと違うっ！！」

スバル

「でかい！」

（時空ホールから少年少女とカイリユーが入ってくる）

少女

「ちょっと！上の説明の“少年少女”って！アタシとこいつをひとくくりにするってどういうことよッ！？」

少年

「レイナ……まずは自己紹介でしょ……」

今回は鏡花水月さんのご紹介で、シアン君、レイナさん、カイリユーさんにお越しいただきました！

シアン

「シアン＝ロビンソンです。あ、ちなみに人間です」

レイナ

「同じく人間、レイナです」

カイリユー

「“星の調査団”団長のカイリユーだ。よろしく」

カイ・スバ

「“星の調査団”？」

カイリユーさんたちがいる世界は、現在“星の停止”を迎えてしま
して……。

心が狂気に染まらなかったポケモンたちで星の停止以前の世界を取り戻そう、という団体ですね。

スバル

「なんか……大変そう」

シアン

「そうなんだよ。あっちじゃ草木も枯れてるし、朝は来ないし」

レイナ

「一緒に話をできるポケモンもいかついのばかりだし」

カイリユー

「……悪かったねえ、いかつくて」

レイナ

「だから、君たちみたいにかわいい子初めて〜!!（ギョッ）」

カイ・スバ

「「うわっ!?!」（レイナに抱きつかれる）」

シアン

「ちょ、ちょっと?レイナさん?」

おお、良い抱きつきっぷりですね。

スバル

「痛い痛いッ!?!」

カイ

「つぶれるーッ!?!?!?!」

カイリユー

「レイナ、そろそろやめてあげないと彼らが地獄を見ることになってしまうよ」

レイナ

「別にいいじゃない」

カイ

「ぶはあッ!!」

スバル

「……死ぬかと思った……」

しみなさん。そっちの世界がアレですけど、こっちに対談に来て大丈夫ですか？

シアン

「まあ、今日は息抜きの日みたいなものだから。ねえ？カイリユースさん？」

カイリユー

「うん。まあそうだね……それで、レイナ？君、今度はなにをやっているんだい？」

レイナ

「このクッキーおいしいー!!」

カイリユー・シアン

「……」

カイ

「うーん、ただのクッキーだけどねえ」

スバル

「ものかきが安値で買った市販の」

そこまでリアルな話をせんでいい！！

レイナ

「あつちじゃこんな美味しいもの食べられないのよー！！」

シアン

「たしかに、僕らが普段食べてるものと言えば……ひm」

あー！シアン君、こんなところでリアルな話はちよつと；

カイリユー

「カイ君たちに、私たちの世界の食物連鎖ピラミッドの底辺を知られてはならない！」

カイ・スバ

「「??」」

レイナ

「確かに、知らない方がいいわね。（ボリボリ）」

シアン

「レイナ……クッキーのカスがボロボロ落ちてるよ……」

さて、ではさっそく今回のテーマを発表しましょう！ズバリ……？
（カンペをチラ見）

……え……。

スバル

「何々？どうしたの？」

カイ

「いきなり固まっちゃって」

レイナ

「何よ、もう！じれったいわね。アタシが読んであげるわ！（カンペ強奪）」

うわぁッ！？な、何をするんですかレイナさんッ！！

シアン

「あちゃあ」

レイナ

「えーっと、うわ！“キャラが作者に求めるもの”ですって！」

全員（ものかきを除く）

『おおー！』

カイ

「これはいいね！」

スバル

「こういうテーマを待ってたんだよ！キャラたちは！！」

作者は望んでいません。

カイリユー

「普段私たちの切実な声は無視されるからね。いい機会だ、色々物申させてもらおう」

シアン

「ついでに僕の斬撃を……」

死んじまいます；

レイナ

「作者！！ついでにものかきさん！……覚悟はいいかしら？」

ヒイイイツ！？

スバル

「では！さっそく順番に作者への日頃の鬱憤をはらしましょう！」

カイ

「あれっ、何でスバルが司会……？」

スバル

「だって、物申される側が司会してちゃダメでしょ」

シアン

「そうだそうだ」

レイナ

「良いわよ、スバル！」

(泣)

カイリユー

「残念だけど、同情の余地はないね」

グサツ！？

シアン

「じゃあ、まずは僕から。……更新遅いの直せ」

スバル

「いきなりドストライクゾーンね！」

ほっ。

レイナ

「スバルー、なんかここに安堵のため息ついてる奴がいまーす」

い、いやぁ……別に安堵というわけでは……。

カイ

「ものかきだつて、ストックもう無いじゃん」

ぐさあつ!?

カイリユ―

「急所に当たった」(棒読み)

シアン

「後、初期に書いた小説の書き直しは早々にやっておいた方がいいって何回も言ってるのに。そろそろ体に教え込まないとダメなのか(木刀用意)」

カイリユ―

「地獄を見せてやりたいね」

こ、怖いです、お二人とも；

スバル

「ここにも体で教え込まないとわからない人がいるよね(ハリセン用意)」

やめてくれええええ!!

カイ

「なんか、ものかきが哀れに思えてきたよ……」

スバル

「では、次にレイナさん!!」

まだやるの……。

レイナ「うーん……自分でも捻くれてるって自称出来る表現はどうにかならないかしら」

そ、それは所謂ツンdぐほあっ!？

レイナ

「何か言ったかしら？」

カイリユー

「見事なストレートパンチだねえ」

カイ

「カンカンカン!!」 口頭

シアン

「なに？今の」

カイ

「ゴングです」

……（ピクピク）

レイナ

「後、異様に短い会話は少なめにしてほしいわ」

スバル

「確かに、会話が端的になるのはやだなあ」

くっ……き、君たち……作者が会話文を作るのにどれぐらいの労力を費やしてるとおm

カイ

「そんなの知らないよ」

ぐはっ！？カイの冷たい台詞が一番地味に……（がくっ）

シアン・カイリユー

「カンカンカンカンー！！」

スバル

「では最後に、カイリユーさんが物申します！！」

カイリユー

「正直に言ってしまったてもいいのかい？」

カイ

「（絶対怖いよお……）」

シアン

「（カイリユーさんの口からどんな言葉の矢が飛び出るか……）」

レイナ

「（楽しみね）」

カイリユー

「うーん……そうだねえ。まずは、描写が解説になっている件」
ぐっ!?

カイリユー

「世界観に合わないものを詰め込むのを止めて欲しい件」

のおおっ!!

カイリユー

「あと、技名を意味無く叫ばせるのは止めた方が良い」

ぐはぁぁあッ!?

スバル

「さ、作者が再起不能寸前に!?!」

カイ

「うわぁ……（ガクブル）」

シアン

「えげつない」

カイリユー

「あと……」

レイナ

「まだあんの!?!」

カイ・シアン

「「やめたげてーッ!!」」

カイ

「ものかき完全に動かなくなっちゃったね」

カイリユー

「生ける屍と化したね」

レイナ・スバル

「「物騒……」」

シアン

「でも、キャラたちしかいないから言うけどさ、なんだかんだ作者には感謝してるよね」

レイナ

「おっ？作者をそんな風にいうなんて珍しいわね」

シアン

「確かに更新はアレだし、修正もしないし、斬撃飛ばしたくなるし」

スバル

「誤字脱字多いし、同じ間違いするし、自分の都合で文が変わるし」

シアン

「だけど、やっぱり作者がいなかったら僕たちはいないわけだから」

カイ

「そうだよな。なんだかんだ言って僕らはそれなりに楽しんでるよね」

レイナ

「ム力つくけどアタシも一緒」

カイリユー

「まあ、私たちにできることはやはり時に優しく、時に厳しく作者を見守ることしかないが……そんな私たちは、作者に頑張ってほしいからこそこう言っただ」

全員

『早く更新しろ』

ぐふう……。

カイ

「あ、ものかきが起きた」

シアン

「気絶してる時間長かったね、さすがカイリユーさんの精神攻撃」
カイリユー

「ははは、照れるね」

レイナ

「誉めてないわ；」

で……ものかきが気絶している間に何の話をしていたのですか？

スバル

「ううん、別に」

レイナ

「相変わらず作者の悪口言ってたよねー」

はあ、さいですか；

では、皆さんとはそろそろお別れです。

レイナ

「えー……ッ！？まだクツキーを胃袋の半分しか入れてないのにい
！！」

カイリユー

「まんぱんに詰めるつもりだったのかい；」

シアン

「ほら、他のみんなも待ってるだろうし、そろそろね」

レイナ

「うーん……しょうがないわね！じゃあ、二人ともさよならね」

カイ

「そっちは色々大変だろうけど、負けないでね!」
スバル

「応援してるっ!」

カイリユー

「ありがとう」

シアン

「じゃあ、帰りますか!」

カイ・スバ

「さよーならー」

では、今回もあの言葉で締め括りましょう!

ぴかっとひらめき、さらっとかいけつ! 時空ホールうつつ……閉
じよ、塩っ!

おまけ へっぽこ本編 第五十九話でもしもこんなことが起きていたら……。

作者がバカなことをやりました。

おまけ へっばこ本編 第五十九話でもしもこんなことが起きていたら……。

> i 3 4 4 3 1 — 4 0 8 9 <

ローゼ

「ものかき作者……なんですかこれは」

いや、ね。授業中にいきなり思いついたもので、そそくさと書いていたんですよ。

ローゼ

「よく投稿する気になれましたね。こんなシャープペンシルで描いた補助線も消していない漫画、しかも線がばやけているものを。」

それを言わんでくれ。

ローゼ

「もちろん、わたくしは噛んでもいませんし、テイク2もしていませんよ？撮り直してません。というか、これは撮影ではありません。作者の妄想です」

ヴェッタ

「しかもなんか私がボケっぱいオチを担当していますし……いちおう、悪役なんですよ？」

いや、メタな場では何でもありなのさ。

ヴェッタ

「しばいていいですか？（怒）」

ローゼ

「どつぞ」

やめいい！

おまけ へっぽこ本編 第五十九話でもしもこんなことが起きていたら……。

授業中に何やってるんでしょねまったく……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4641u/>

へっぽこポケモン探検記 番外編～憩いの部屋

2011年11月7日21時10分発行